

松前町横田遺跡IV区調査報告書

2003年

松前町教育委員会

松前町横田遺跡IV区調査報告書

2003年

松前町教育委員会

序 文

松前町は、田園、湧水、海浜に象徴される自然豊かな町です。古来より重信川氾濫原に開け、海上交通の要衝として、発展して参りました。

今回、伊予郡松前町横田地区の農道改良工事に伴い、当該地区に所在する埋蔵文化財の発掘調査を、松前町教育委員会が実施しました。この地域は、大谷川の肥沃な扇状地に開け、稲作灌漑を行いながら早くよりムラが形成されていたところです。そのことは、先に報告された横田Ⅰ区からⅢ区にかけての調査で解明されてきました。

今回の調査は、比較的天候にも恵まれ、予定どおり作業を終了いたしました。結果、今回の調査の成果も、非常に貴重なものとなりましたので、今後の発掘調査に大いに期待が寄せられるところです。

ここに、発掘調査員として指揮をとられた愛媛考古学研究所・長井數秋氏、その補助並びに作業に当られた皆様方の御労苦に感謝申し上げますとともに、各関係機関、地元の方々の多大なるご協力に、厚く御礼申し上げます。

なお、本報告書が今後の郷土の歴史解明のため、また文化財愛護の普及・啓発に御活用いただければ幸いに存じます。

平成15年3月

松前町教育委員会

教育長 赤星 哲一

例　　言

1. 本報告書は、愛媛県伊予郡松前（Masaki）町大字横田141番地の、水田中に所在した横田遺跡IV区の発掘調査報告書である。
2. 本発掘調査は、松前町教育委員会による農業整備事業に伴う道路建設予定地である『伊予郡松前町大字横田146-1外の埋蔵文化財試掘調査報告書』に基づいて、松前町教育委員会が実施したものである。
3. 松前町横田遺跡は広範囲であり、今回の調査が第4次に当たるため、横田遺跡IV区として報告したい。
4. 現場での発掘調査は平成13年4月9日から平成13年5月18日までであった。
5. 出土遺物の整理並びに報告書作成は、平成14年5月20日より平成14年11月30日まで行った。
6. 発掘現場の写真撮影は長井數秋が、出土遺物の写真撮影は長井と西岡若水が行った。
7. 発掘現場の測量は長井數秋と西岡若水、田中俊臣が中心になって行った。
8. 遺構・遺物の図面作成と報告書執筆は長井と西岡が、編集は長井が行った。
9. 本報告書中の絶対高は標高を表し、図中の北は磁北を表している。
10. 発掘調査の組織は以下の通りである。

発掘調査担当者	長井 数秋（愛媛考古学研究所・日本考古学協会員）
調査員	西岡 若水（愛媛考古学研究所）
調査補助	岩崎 正美 岩崎 美音 金子ユミコ 篠崎 清 萩野 彦一 日野 隆夫 宮井 郁 渡部 純世
調査事務局	松前町教育委員会教育長 赤星 啓一 松前町教育委員会 社会教育課 課長 吉田 健勝 松前町教育委員会 社会教育課 課長補佐 平村 覚 松前町教育委員会 社会教育課 生涯学習係長 山本 有三 松前町教育委員会 社会教育課 生涯学習係主査 田中 俊臣
11. 今回の調査では、松前町福祉課と国土調査課の多大の協力を得た。また、報告書作成では西岡信次氏の協力を得た。伏して感謝の意を表したい。

本文目次

I	はじめに	1
1	調査に至る経緯	1
2	調査の経過	1
II	遺跡周辺の環境	4
1	遺跡周辺の自然環境	4
[1]	位置	4
[2]	地質と地形	5
(1)	地質	5
(2)	地形	5
2	遺跡周辺の歴史環境	7
[1]	旧石器時代	7
[2]	縄文時代	7
[3]	弥生時代	8
[4]	古墳時代	8
[5]	古代・中世	8
III	調査概要	9
IV	調査の成果	12
1	堆積層序	12
2	検出した遺構と出土遺物	14
[1]	住居跡と出土遺物	14
(1)	住居跡	14
(2)	出土遺物	15
[2]	1号溝状遺構と出土遺物	17
(1)	1号溝状遺構	17
(2)	出土遺物	19
[3]	1区出土の遺物	19
[4]	1号土坑と出土遺物	19
(1)	1号土坑	19
(2)	出土遺物	20
[5]	2区出土の遺物	21
[6]	2号土坑と柱穴群	23
[7]	2号溝状遺構	23
[8]	3区・4区出土の遺物	23
[9]	大溝遺構と出土遺物	24
(1)	大溝遺構	24
(2)	出土遺物	27

[10] 3号溝状遺構	34
[11] 集石遺構と柱穴群	35
(1) 1号集石遺構	35
(2) 2号集石遺構	35
(3) 柱穴群	35
[12] 1号掘立柱建造物跡	36
[13] 4号溝状遺構とぬるめ遺構	37
(1) 4号溝状遺構	37
(2) ぬるめ遺構	39
(3) 4号溝状遺構出土の遺物	40
(4) ぬるめ遺構出土の遺物	41
[14] 4号溝状遺構周辺の柱穴	42
[15] 9区出土の遺物	42
[16] 2号掘立柱建造物跡	43
[17] 10区出土の遺物	45
[18] 3号土坑	45
[19] 5号溝状遺構と出土遺物	45
(1) 5号溝状遺構	45
(2) 出土遺物	46
[20] 6号溝状遺構	46
[21] 4号土坑	46
[22] 5号土坑と出土遺物	48
(1) 5号土坑	48
(2) 出土遺物	48
[23] 11区出土の遺物	49
Vまとめ	50
1 縄文時代	50
2 弥生時代	50
[1] 弥生前期	50
[2] 弥生後期	53
3 古墳時代	55

図 目 次

第1図. 松前町の位置	1
第2図. 遺跡の位置	5
第3図. 遺跡周辺の地質図	6
第4図. 横田遺跡IV区と周辺の地形図	7
第5図. 横田遺跡調査地区位置図	10
第6図. 1区～12区の遺構分布図	11
第7図. 2区～10区の堆積層序図	13
第8図. 住居跡平・断面図	15
第9図. 住居跡内の遺物の出土状況	16
第10図. 住居跡出土の遺物	17
第11図. 1号溝状遺構平・断面図	17
第12図. 1号溝状遺構内の遺物の出土状況	18
第13図. 1号溝状遺構出土の遺物	18
第14図. 1区出土の遺物	19
第15図. 1号土坑平・断面図	20
第16図. 1号土坑出土の遺物	21
第17図. 2区出土の遺物	22
第18図. 2号土坑平・断面図と柱穴群	24
第19図. 3区・4区出土の遺物	25
第20図. 大溝遺構平・断面図	26
第21図. 大溝遺構内の遺物の出土状況	28
第22図. 大溝遺構出土の遺物（1）	29
第23図. 大溝遺構出土の遺物（2）	30
第24図. 大溝遺構出土の石器	32
第25図. 大溝遺構出土の須恵器拓影	33
第26図. 大溝遺構出土の土器拓影	34
第27図. 大溝遺構出土の木器	34
第28図. 3号溝状遺構平・断面図	35
第29図. 3号溝状遺構出土の弥生土器	36
第30図. 1号集石遺構平・断面図	36
第31図. 2号集石遺構平・断面図	37
第32図. 1号掘立柱建造物跡平・断面図	38
第33図. 4号溝状遺構・ぬるめ遺構平・断面図	39
第34図. 4号溝状遺構・ぬるめ遺構の遺物の出土状況	40
第35図. 4号溝状遺構出土の遺物	41
第36図. ぬるめ遺構出土の遺物	42

第37図。P 1 0 と 9 区出土の遺物	43
第38図。2 号掘立柱建造物跡平・断面図	44
第39図。1 0 区出土の遺物	45
第40図。3 号土坑平・断面図	46
第41図。5 号・6 号溝状遺構と 4 号土坑平・断面図	47
第42図。5 号溝状遺構出土の遺物	48
第43図。5 号土坑平・断面図	48
第44図。5 号土坑出土の遺物	49
第45図。1 1 区出土の遺物	49
第46図。横田周辺出土の縄文土器	50
第47図。横田遺跡周辺の弥生前期前半の土器	51
第48図。横田遺跡の弥生後期の土器	54
第49図。横田遺跡周辺の須恵器	56

松前町横田遺跡IV区調査報告書

I はじめに

1 調査に至る経緯

松前町が担当者となって、松前町大字横田地区で農業基盤整備事業に伴う道路建設を計画した。平成13年に道路建設予定地が、周知の横田条里制遺跡内にあることから、町当局から松前町教育委員会に対して、域内に埋蔵文化財が遺存するかどうかの調査依頼があった。

そこで、松前町教育委員会は道路建設予定地内に埋蔵文化財が遺存しているかどうかを明らかにするため、平成13年2月7日に試掘による確認調査を行った。試掘箇所は四箇所で、すべて水田中であった。

その結果、四箇所で実施した試掘溝（以下トレンチという）のうち、西部のT1、T2の二箇所のトレンチで遺物包含層を確認した。西端のT1トレンチでは厚さ17cmの2層の黒褐色粘質土中に有機質分と微細な土器片が認められ、2層自体も安定した状態で堆積していた。T2トレンチでは厚さ15～16cmの2層の黒褐色土中に、微細な土器片を含む遺物包含層を認めた。更に、トレンチの西部の地山面上に、直径20cm、深さ10cmの柱穴跡1個と、東部で幅3.5cm前後の溝状遺構を検出した。遺物包含層中から出土した土器片は、細片であるため明確な時代決定をすることはできなかったが、弥生後期の可能性が濃厚であった。

以上の結果から、道路建設予定地のうち、西端の道路から東約60mの範囲は、埋蔵文化財包蔵地であることが判明した。これらの試掘確認調査に基づき、松前町教育委員会は愛媛県教育委員会文化財保護課と協議を行い、

道路建設予定地の一部について発掘調査を行う必要を認め、松前町当局に説明し、発掘調査の必要性について理解を得た。

このことにより、平成12年度末までに調査の準備を行い、平成13年度早々に発掘調査を実施することにした。

2 調査の経過

4月9日（月）

松前町教育委員会の調査担当者と、発掘調査担当者が現地で最終的な打ち合わせを実施。

4月10日（火）

9時より発掘調査開始の会。社会教育課長と福祉課長の挨拶のあと、調査担当者から発掘作業上の留意事項の説明。10時30分より発掘作業開始。



第1図 松前町の位置

1区～4区の表土層と水田床土、2層上部の土砂を排土。のち1区2層の発掘に着手。1区西隅から方形プランの住居跡の一部を検出。

4月11日（水）

1区の住居跡の検出を続行する。住居跡の埋土内から弥生土器の細片出土。2区の3層を掘り下げる。4区～12区の表土をバックフォーで排土。

4月13日（金）

1区の西部を拡張して0区とする。0区～1区の住居跡内から弥生時代の浅鉢と有溝石鍤出土。0区南部の2層中から東西に走る溝状遺構を検出。溝面上から中世の遺物が若干出土。

2区3層の黒褐色土を掘り下げるも、層中からは若干の弥生土器の細片が出土しただけで、遺構は存在せず。

4月16日（月）

0区～1区の住居跡と溝状遺構の測量と写真撮影。並行して2区西部と北部の3層を除去し、3層下面の遺構の有無を追求。

4月17日（火）

前日に引き続いて2区北部の3層を発掘。遺構とみられるものを検出したが、最終確認までには至らず。午後より3区の土坑の発掘。土坑内の埋土は淡灰色細砂質土であり、その中に黒褐色土がブロック状に混入していたが、遺物の出土はなし。3区と4区の南端から溝状遺構を検出。遺構中の埋土は淡灰褐色細砂質土で、遺物の出土はなし。

4月18日（水）

4区南端の溝状遺構の追求を続行。深さは10～16cmで、埋土は淡灰褐色細砂質土であり、遺物の出土はほとんどなし。2区北端から円形土坑を検出したが、半分は民家の敷地に延びていた。土坑床面近くから木炭片や弥生土器の細片、川石が出土。5区から南北に走る幅60cmの溝状遺構を検出。溝状遺構は地山相当層の茶褐色粘質土中に掘り込まれ、層中に微細な木炭片を含んでいた。

4月19日（木）

2区の1号土坑を完掘。4区～5区にかけて厚く堆積していた黒褐色土を、厚さ5cm単位で掘り下がたが須恵器の細片が出土するだけで、明確な遺構といえるものはなし。

4月20日（金）

2区の1号土坑と3区の2号土坑の測量と写真撮影。のち遺物の取り上げ。並行して4区～5区の黒褐色土の掘り下げを続行するも、遺物、遺構の出土なし。午後より8区～9区の3層の発掘。

4月23日（月）

4区～5区の黒褐色土の掘り下げを続行。東部と西部の掘り込みが斜めになっているので、大溝遺構の可能性が濃厚となる。並行して9区～10区の3層を掘り下げ、遺構の検出に努める。9区で遺構とみられるものを検出。

4月25日（水）

4区～5区の大溝遺構中出土の遺物の測量と写真撮影。のち遺物の取り上げ。大溝遺構の法面下約60cm付近は、細砂質土が流れ込んだ状態を示していた。細砂質土中に草類の炭化遺体や土器の細片が混在。

4月26日（木）

4区～5区の大溝遺構の掘り下げを続行。東西の両法面が綺麗に現れたが、深さは不明。大溝中の下部の土砂堆積は、流れのはとんどない汚泥が静かに堆積した状態を示していた。大溝遺構中から弥生土器片が出土しはじめ、須恵器は出土しなくなった。並行して9区～11区の2層の掘り下げを行う。

4月27日（金）

終日、大溝遺構の掘り下げを行い、深さ100cmまで掘り下げた。床面近くから土器片が出土。いずれもが二重口縁をもつ弥生後期の壺である。並行して9区～11区の2層の発掘を行う。11区北部の2層上面近くから須恵器片がわずかに出土。

5月1日（火）

前日の大雨のため発掘地区全体が完全冠水で、10時まで排水。のち大溝遺構の床面の検出。清掃のあと写真撮影。並行して9区の2層と3層の掘り下げを行う。3層は黒褐色土の遺物包含層で、層中には微細な須恵器片と弥生土器片が混在。

5月6日（日）

終日、明日からの発掘再開に備え排水。

5月7日（月）

冠水していない10区と11区の中央部の2層の掘り下げを行うも、若干の土師器片と須恵器片が出土しただけで遺構はなし。

5月8日（火）

昨夜の大雨のため発掘を中止し、排水を行う。

5月9日（水）

9区～11区の排水のあと、2層の掘り下げ。8区～9区で南北に走る溝状遺構と、これに付随するとみられる落ち込みを検出。溝状遺構内から須恵器片出土。10区で長円形土坑1基を検出。長円形土坑内の埋土は黒褐色土であったが、遺物の出土はなし。10区内の地山上から6本の柱穴を検出。

5月10日（木）

6区～7区の地山面を精査し、遺構の有無の確認を行うも遺構なし。7区では2基の和泉砂岩の川石からなる集石遺構を検出。7区では集石遺構に接して5本の柱穴跡を検出。6本柱の掘立柱建物跡とみられ、うち2本の柱穴内から弥生土器片出土。

5月11日（金）

2基の集石遺構の測量と写真撮影。8区の地山面を精査し、遺構の有無を調査するも遺構なし。8区と9区の溝状遺構と方形竪穴状遺構の検出に努める。竪穴状遺構内から石杵1点と土師器片が出土。溝状遺構は出土する土師器片や須恵器片から5世紀後半から6世紀前半に該当

するようである。午前中、町長と助役が発掘状況観察。

5月12日(土)

5区の大溝遺構、8区～9区の溝状遺構と、それに伴う竪穴状遺構の測量。7区～8区の柱穴群の測量。

5月14日(月)

7区の2基の集石遺構の測量を継続。続いて7区と8区の清掃。のち写真撮影。並行して5区の大溝遺構の写真撮影。8区と9区の溝状遺構とそれに伴う方形竪穴状遺構の精査。方形竪穴状遺構は水田の「ぬるめ」遺構の可能性あり。9区と10区の地山面上を精査し、数本の柱穴跡を検出。

5月15日(火)

7区の2基の集石を除去し、下部の遺構の有無を調査するが、墓坑のような掘り込みはなし。9区の溝状遺構の北端で、溝を挟んだ状態で東西に並ぶ柱穴跡を検出。並行して8区～9区の溝状遺構と方形竪穴状遺構の写真撮影。

5月16日(水)

8区と9区の溝状遺構と方形竪穴状遺構、掘立柱建造物跡の測量。10区と11区の地山面上の精査を行い、遺構の有無を確認。続いて10区と11区の遺構の測量と地層断面図作成のための壁面の削り出し。

5月17日(木)

堆積層序図の作成。発掘地区全体の清掃。のち遺跡全体の写真撮影。午後より発掘機械や発掘道具の整理、仮事務所内の整理。

5月18日(金)

発掘道具の整理と運搬を行い、正午で現地での発掘作業をすべて終了。

II 遺跡周辺の環境

1 遺跡周辺の自然環境

(1) 位置

横田遺跡IV区の所在する松前町は、愛媛県中央部の伊予灘に面する松山平野南部にあり、町内全域が重信川や大谷川、長尾川の形成した氾濫原や三角州からなる低地であり、愛媛県内唯一の山や丘陵のない町である。松前町北部は重信川を境に松山市と接し、東部は伊予市と一部砥部町に、南部は横田を例外としてほぼ大谷川を境に伊予市と接し、西は瀬戸内海の伊予灘に面している。

横田遺跡IV区の絶対位置は、北緯 $33^{\circ}46'20''$ 、東経 $132^{\circ}43'50''$ の交差する地点を中心にして東西60mの範囲である。行政位置は、愛媛県伊予郡松前町大字横田141番地で、地目は水田である。垂直位置は、標高8.1mで、西方の伊予灘までの直線距離は約3kmである。本遺跡の南約300mにはJR四国の予讃線が走り、伊予横田駅がある。南400m

には東西に県道伊予・川内線が走っている。

松前町大字横田の西部には小河川が南から北に向かって流れ、これが伊予市と松前町の境界となっている。大字横田は主軸方向を南北にとる方1里であり、古くから古代の条里制が良く残存しているといわれ、埋蔵文化財包蔵地も条里制遺構として登録されているが、その痕跡は全く存在しない。遺跡の西部20

0mには横田地区の産

土神を祀る素鷦神社が鎮座している。

[2] 地質と地形

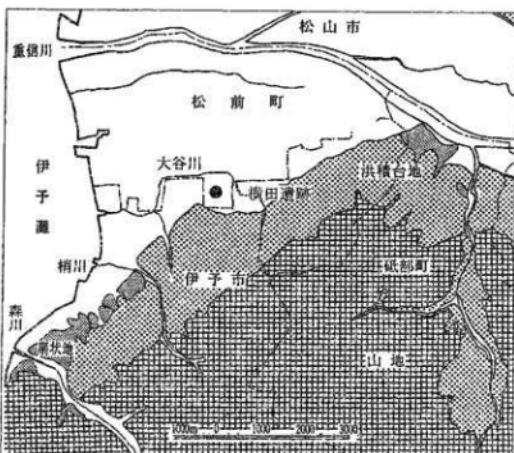
(1) 地質

地体構造的には、本遺跡の南約7kmに中央構造線がほぼ東西に走っており、これより以南を西南日本外帯、以北を西南日本内帯と呼んでいる。従って、本遺跡を中心とする松山平野南部は西南日本内帯となる。中央構造線の北部の谷上山(445.5m)から行道山(403m)、金松山(257m)にかけては和泉層群の山塊が連なり、地質的には砂岩泥岩互層や砂岩がちの砂岩泥岩互層からなっている。山塊の北端面は伊予断層が北東から南西方向に走っているため、末端面となり、急傾斜面を形成している。

遺跡の東部を北流する大谷川や北部の長尾川、西部の梢川は、この和泉層群に水源を発している。西端の森川だけは中央構造線以南の西南日本外帯に水源を発している。大谷川上流の谷上山には極く狭い範囲に角閃石安山岩が分布し、和泉層群の砂岩泥岩互層中に狭く帶状に酸性凝灰岩が存在するだけである。それ故、横田遺跡周辺は和泉砂岩か泥岩の風化土がほとんどであり、一部角閃石安山岩や凝灰岩が混入しているだけである。これら以外の土砂や岩石は、人為的に他地域から持ち込まれたものである。

(2) 地形

西瀬戸内海の伊予灘に流出する重信川は、その流域に肥沃な松山平野を形成している。この重信川の下流の左岸一帯には、氾濫原や三角州からなる低湿地が広がっている。氾濫原や三角州の南部には、重信川の形成した河岸段丘や古期扇状地が続き、更にその南部には前述したご



第2図 遺跡の位置



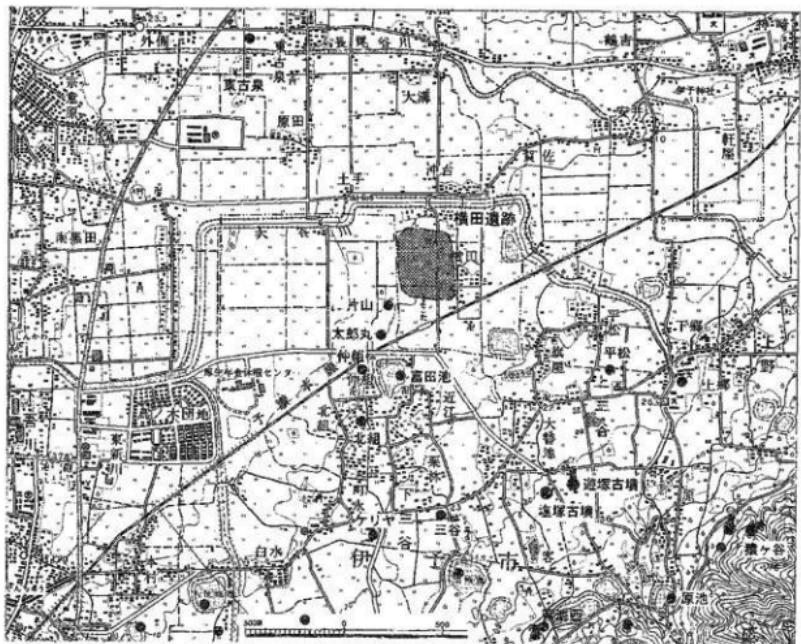
第3図 遺跡周辺の地質図

とく標高300～400mの和泉層群からなる山塊が連なっている。

和泉層群は砂岩や泥岩からできており、地層が比較的軟弱であるため、圧碎や傾斜の具合によって滑落が激しい。特に集中豪雨等の際には土砂崩壊を起こし、鉄砲水となって下流に土砂を押し流す。そのため、河川が平野に流れ出る谷口には、浸食された土砂が運搬され、小扇状地や崖水が形成されている。

扇状地の大部分は更新世に形成された古期扇状地である。本遺跡の南約500mを東西に走る県道伊予・川内線以南の地がこれに相当する。砥部町と伊予市の境界線付近に水源を発する大谷川は、軟弱な和泉層群を開析し、谷口に古期扇状地を形成しながら天井川となって北流し、伊予市平松で北西に向きを変え、松前町横田を西流し、再び向きを南と西に変えながら伊予灘に流れ出ている。大谷川は集水面積が小さいため水量が少なく、降雨があっても河床面の傾斜が急なため、一度に流出してしまい、古期扇状地上は乏水地帯となっている。そのため、山麓に大谷池をはじめ原池、新池、客池、岩崎池、小林池が、扇端には富田池、楠木池、蓼原池などの農業用溜池が多く構築されている。

標高7～8m付近は扇端となり、氾濫原や三角州へと続いている。本遺跡は古期扇状地の扇端部近くに位置しているため、地下水には比較的恵まれている。大谷川の古期扇状地の扇端部分に、東から西に向かって伊予市平松・旗屋、松前町横田、伊予市片山・北替地・太郎丸・富田池・仲組・北組と多くの縄文晩期から弥生、古墳時代の遺跡が隙間のないほど分布している。これらの遺跡立地は、この地が湧水地帯であることと無関係ではなかろう。



第4図 横田遺跡IV区と周辺の地形図

2 遺跡周辺の歴史環境

ここでは横田遺跡周辺と松前町内に限定して、時代別に述べてみたい。

(1) 旧石器時代

松前町は町内全域が氾濫原や三角州からなる平坦地であり、台地や丘陵がないためか、現在まで旧石器時代の遺物の発見の機会には恵まれていない。本遺跡の東約1kmの伊予市平松から細石核が1点、猿ヶ谷から角錐形石器が1点出土しており、伊予市岩崎池と征露池からもナイフ形石器が8点ほど出土している。このうち遺跡といえるものは征露池だけである。

(2) 繩文時代

横田遺跡III区から爪形文をもつ前期の土器が1点出土しているので、横田周辺に前期の遺跡の存在を期待したい。後期になると、松前町神崎から土器と姫島産黒曜石製石器が、伊予市上三谷石橋から土器が出土しているが、遺構は確認されていない。晩期になると本遺跡の南西300mの伊予市片山では土坑と、それに伴って深鉢が出土しているので、横田周辺に集落が存在していることはほぼ間違いない。繩文晩期遺跡の低湿地進出は、水稻耕作を考える必要がある。

〔3〕弥生時代

弥生時代になると早々に横田遺跡Ⅰ区東や横田遺跡Ⅲ区、横田遺跡Ⅱ区に南接する伊予市片山遺跡から、弥生前期初頭の遠賀川系の土器が住居跡に伴って出土している。片山遺跡では住居跡3棟、土坑状遺構4基、土壙墓1基が、横田遺跡Ⅲ区では住居跡2棟や道路状遺構が出土している。更に、伊予市富田池や仲組、北組にも前期前半の遺跡が広範囲に分布しており、愛媛県内でも最も早く弥生文化が開花した地域の一つであり、当地の縄文晩期の文化基盤の上に発展したものであろう。

松前町内には前期の遺跡がもう二箇所存在する。その一つが本遺跡の北東2.5kmの出作に所在する宝剣田遺跡である。宝剣田遺跡では2基の支石墓が確認されており、そのうちの1基から有柄式磨製石剣が一口出土している。宝剣田遺跡では試掘によって支石墓以外にも溝状遺構などを確認しているので、周辺に集落跡が存在する可能性が大である。本遺跡の北西1.8kmの西古泉からも前期末と後期の重複する遺跡が発見されている。

弥生中期になると、松山平野南部の丘陵頂上や山麓地帯に遺跡が分布するようになる。前者が行道山や猿ヶ谷、春戸口の各遺跡であり、後者が新池や原池、名護の各遺跡である。また、それに続く平野部には平松、上三谷、岩崎池、土井池周辺などに遺跡がみられるようになる。

後期になると、本遺跡の南方500mには太郎丸、片山、北替地、仲組、北組の各遺跡が広がっている。このうちの太郎丸と片山遺跡は、本遺跡と同じ時期の遺跡であり、関連性が認められる。本遺跡の西300mには、前期の横田遺跡Ⅰ区東を間に挟むように、後期の河川跡が発見された横田遺跡Ⅰ区やⅡ区が所在する。平松から本遺跡、横田遺跡Ⅱ区、太郎丸、片山の各遺跡群は、大谷川の形成した古期扇状地の扇端部に位置しており、比較的水に恵まれている。

〔4〕古墳時代

古墳時代前期の様子は現在までのところ不明であるが、中期になると松山平野南部山麓を走る伊予断層線上の丘陵上に、桜山や新池南、猿ヶ谷、南坂、客池古墳が分布するようになる。丘陵頂上部に分布する古墳群は、横穴式石室をもつ比較的規模の大きな円墳であり、一段低い丘陵上には、中期の小型前方後円墳である猿ヶ谷や客池西古墳、箱形石棺を内部主体とする古墳が分布している。これらの中期古墳に関連する代表的遺跡が、祭祀的色彩の強い出作遺跡や東古泉、太郎丸の各遺跡であろう。

猪の窟古墳や猿ヶ谷古墳、市場南組窯跡、出作遺跡の存在などから、古墳中期には横田から神崎にかけての地域に、大きな政治的、経済的基盤をもった統括者の存在が想定される。

後期になると、山麓下の古期扇状地の扇頂部から扇央部にかけて遊塚、塩塚、ケリヤ、松本、風呂ヶ谷と、中規模の古墳が分布するようになるが、古墳以外の遺構は内台と太郎丸、北替地の各遺跡以外は明らかでない。今までのところ、長尾谷川や大谷川の扇端を含む低地には古墳は構築されていない。低地に構築された古墳は、伊予市のケリヤ遺跡だけであるが、将来発見される可能性は高い。

〔5〕古代・中世

古代の遺跡は伊予市の上吾川古泉廃寺跡くらいのものである。ただ、本遺跡の北1km付近の

水路中から古代寺院の礎石が出土しており、安井や神崎を中心とする地域に古代寺院跡が存在する可能性が高い。また本遺跡の北東部から東部の平野中には、式内社である伊豫神社、伊曾能神社、高忍姫命神社が集中しており、古代においては松山平野でも中心をなす地域であったことを物語っている。この地域は古代の伊余国造の設置された地域とも重なっている。更に、律令体制下になると伊豫郡内の神崎、吾川、岡田郷に取り囲まれており、伊豫郡のみならず伊豫国を中心とした可能性も否定できない。

考古学的にみた中世の様相も不明な点が多い。ただ、そのなかにあって出作楠木遺跡からは、掘立柱建造物跡群と中世土墳墓が発見されており、将来同じような遺跡が発見されるとみてよい。松山平野南部には、鎌倉時代から室町時代にかけての多宝塔や五輪塔が特に多く遺存しているので、人々の活動が活発に行われていたことは間違いないだろう。

中世後半になると、松前町筒井の砂丘海岸に後背湿地をうまく利用した松崎（真崎・正木）城が築城され、この城を中心に政治が行われるようになった。松前海岸に中世後半を代表する城が築城されたのは、背後に肥沃な松山平野を控えていただけではなく、西瀬戸内海の海上交通の要衝的位置を占めていたからであろう。特に、北九州地方との海上航路と密接な関係があったからとみてよかろう。

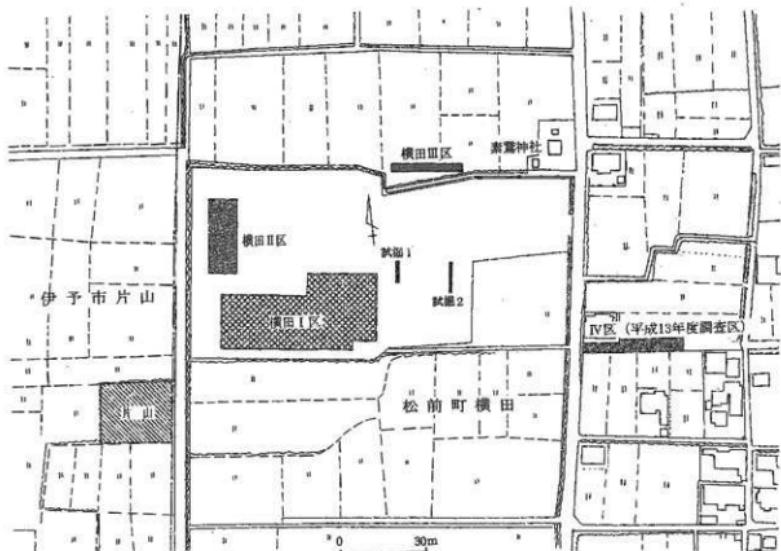
III 調査概要

松前町大字横田141番地を中心とする横田遺跡IV区の調査地区は、東西の長さ58m、南北幅4.5mの細長い帯状で、面積は264m²弱である。調査地区的地目は水田で、調査時点では一枚の水田となっていたが、かつては東西の中央部に畦があり、二枚の水田となっていた。のち東部の水田を地下げして一枚の水田にしたとのことである。西部から約60m地点以東に遺構が遺存しなかったのも、地下げで遺構面が削平されていたからかも知れない。

調査地区的遺物包含層は黒灰色土であり、検出したいずれの遺構も3～4層の淡黄褐色粘質土の地表面を掘削して構築していた。遺構の遺存していた地表面はほぼ水平に近いが、全体的には東高西低となっていた。

検出した遺構は弥生後期と古墳時代、それに中世のものであった。調査地区的0区の北西隅では、方形プランの住居跡の1/4ほどを検出した。他は道路と住宅地にかかっており調査は不可能であった。住居跡内の出土遺物からみると、弥生後期末とみて大過なかろう。西端の0区から2区南端には、幅60～100cmの1号溝状遺構が東から西に向かって流れしており、西端ではその深さは23cmとなり、東部では若干浅くなっていた。溝は2区東部と3区西部では南部の調査地区的範囲外に流れ、4区で再び北寄りとなってその姿を覗かせていた。1号溝状遺構は埋土が灰褐色細砂質土であり、出土遺物からみても中世の溝状遺構と理解すべきである。

2区の北東隅では直径140cmの1号土坑を検出したが、その半分は調査地区外にあり、その全貌を明らかにすることはできなかった。この1号土坑は土坑内出土の遺物から弥生時代後期であることが判明した。3区のほぼ中央では長軸150cm、短軸120cmの楕円形を呈する



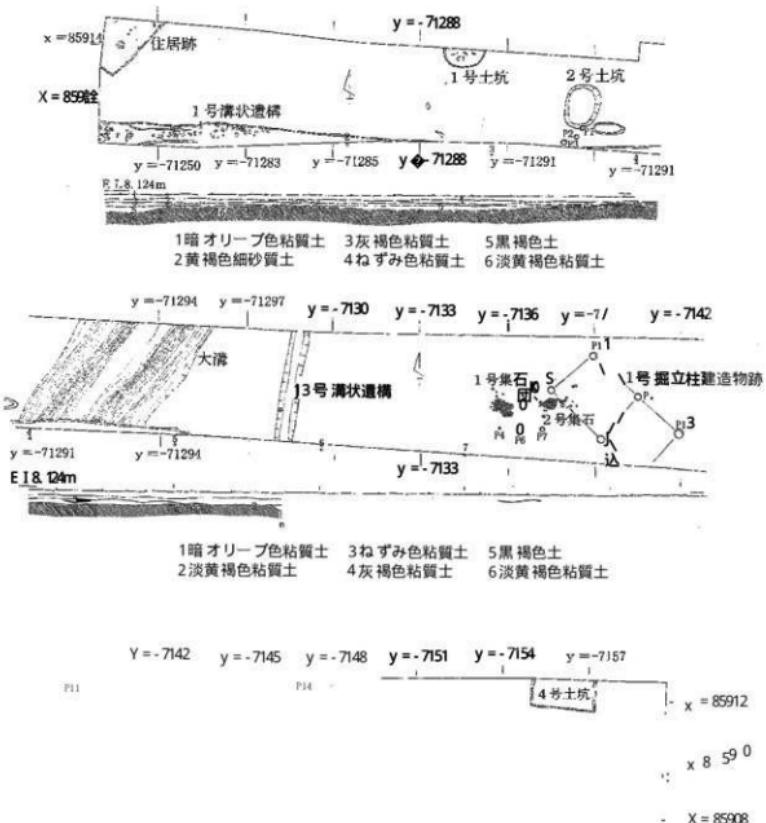
第5図 横田遺跡調査地区位置図

2号土坑を検出したが、出土遺物がなく、時代を明らかにすることはできなかった。2号土坑に南接して小柱穴が3個出土し、土坑の南部に接して小さな2号溝状遺構が遺存していた。

4区には南西から北東に向かって流れる幅4m、深さ190cmの大溝遺構が遺存した。大溝遺構中からは須恵器の細片が多数出土し、下部からは弥生後期の土器片が出土した。恐らく、集落を取り囲む大溝遺構の一部とみてよかろう。5区中央からほぼ南北に走る幅約65cmで、断面が鍋底状の浅い3号溝状遺構を検出した。溝状遺構内から弥生土器片が出土したので、弥生時代の溝とみてよかろう。

6区では遺構の検出はなく、7区中央部の地山上で1号集石遺構と2号集石遺構を検出した。集石遺構はその大半が握り拳大の砂岩の川石であった。集石中には遺物ではなく、集石の周辺に数個の小柱穴と大きな柱穴が存在した。2号集石遺構に東接して長軸方向をほぼ北西から南東にとる6本柱の掘立柱建造物跡を検出したが、そのうちの1本は調査地区外となっていて確認するまでには至っていない。

8区と9区にかけては、南東から北東に向かって流れる幅約50cm、深さ50cmの溝状遺構があり、溝の東側には250cm×180cm、深さ約48cmの方形豎穴状遺構が溝状遺構と一体となった状態で遺存した。溝状遺構周辺や遺構中、並びに方形豎穴状遺構内から須恵器片や土師器片が出土したことから、古墳時代の稻作農耕用の用水路と、それに付随する水田用水を温



第6図 1区～12区の遺構分布図

める「ぬるめ」遺構とみてよかろう。

10区では長軸方向がほぼ南北を指向する6本柱の2号掘立柱建造物跡を検出した。建造物跡内に相当する地山面上から、須恵器片や土師器片が出土したので、古墳時代の建造物跡としておきたい。1号掘立柱建造物跡とは規模はほぼ同じであるが、主軸方向に違いが認められる。10区の南東部では長円形の3号土坑を、11区ではほぼ南北に走る2条の溝状遺構と隅丸方形状土坑を、北端では方形の大きな土坑を検出したが、その大半は調査地区外となっていた。11区検出の5号、6号溝状遺構や方形土坑は、遺構内から須恵器や土師器片が出土したことから、古墳時代中期後半から後期前半の時期に属するとみておきたい。

なお、遺構は弥生時代、古墳時代、中世の三時代が重複しており、遺物も該当するそれぞれの時代のものが出土している。ただ、遺物のなかには数は少ないが縄文土器片や弥生前期の土器片が混在していた。横田遺跡や周辺遺跡からも縄文時代や弥生前期の遺構や遺物が出土している。

IV 調査の成果

1 堆積層序（第7図）

0杭～4杭間は北側で、4杭～12杭間は南側で堆積層序を観察した。

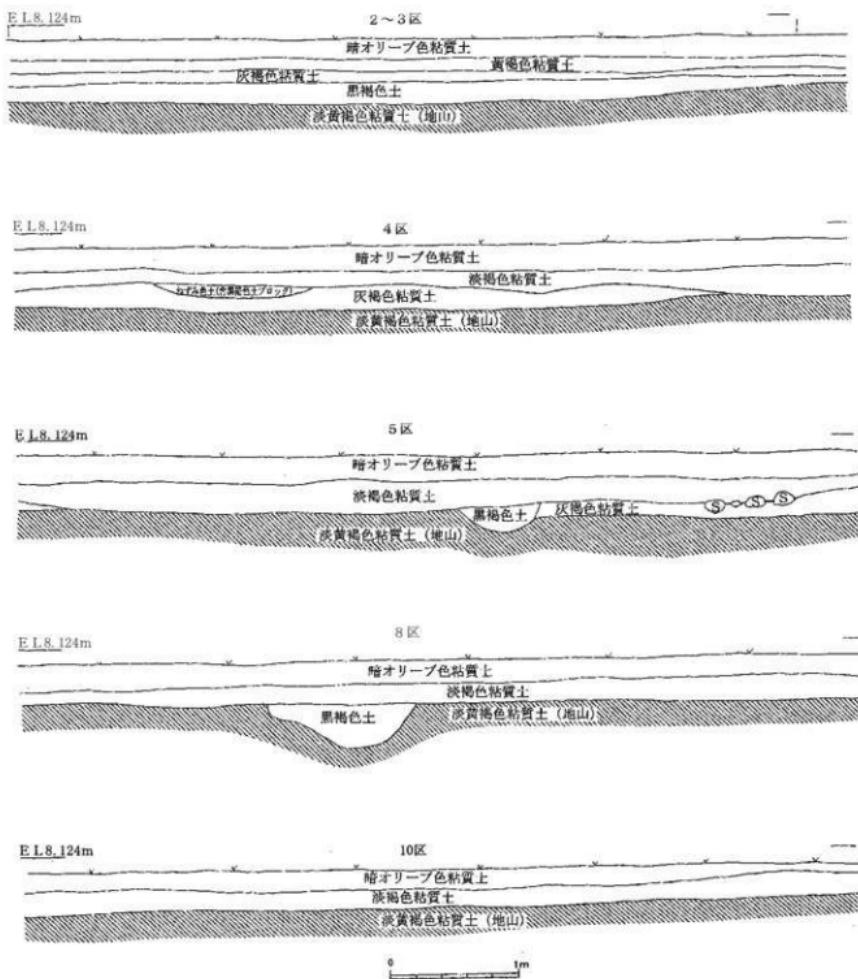
1層の暗オリーブ色粘質土の表土は、15～18cmの厚さで堆積していた。本層中には遺構並びに遺物は存在しなかった。

2層は西部の住居跡上では、厚さ5～10cmの黄褐色粘質土の水田床土である。東部になると色調が次第に褐色粘質土からねずみ色粘質土へと変化するが、水田床土であること変わりはない。本層中にも遺構、遺物は存在しなかった。

3層も西部は厚さ13～15cmの淡茶褐色粘質土であったが、西端から約4m付近では色調が灰褐色粘質土となり、西端から8m付近でねずみ色粘質土へと変化していた。ただ、2層、3層とも色調は徐々に変化しており、その境目を線で表すことは困難であった。0区～1区の南部では、本層を堀り込んで1号溝状遺構が東から西に向かって流れている。1号溝状遺構の床面は、5層の淡黄褐色粘質土の地山を若干浸食していた。3層は中世以降に形成された堆積層ということになろう。

4層は黒褐色粘質土で弥生時代と古墳時代の遺物包含層であり、0区の住居跡上では約20cmと厚くなっていたが、これは流入した埋土によるものであろう。住居跡外の1区では、4層の黒褐色粘質土は2～5cmと薄くなり、2区になると厚さは15cm前後で、安定した堆積状態を示していた。3区になると4層の厚さは8cmとなり、東に行くに従って次第に薄くなり、3区東端では2～5cmとなっていた。2区から3区にかけての4層の黒褐色土が厚い部分に、弥生時代の1号土坑が所在したので、これらに関係した堆積の可能性が想定される。

5層は淡黄褐色粘質土の地山であり、住居跡、1号土坑、2号土坑とも地山を掘削して各遺構を構築していた。中世の1号溝状遺構の床面も地山を一部下刻していた。



第7図 2区～10区の堆積層序図

4区から11区までの35mの間は、南側の地層断面で観察を行った。

1層の暗オリーブ色粘質土の表土は、17~22cmの厚さであるが、東部では10~12cmと薄くなっていた。

2層は淡褐色粘質土で、水田床土は存在しない。4区での厚さは西部が13cm、東部が15~20cm、5区は20~23cmと厚くなり、6区は西部が20cmとなるが、東部は10cmと薄くなっていた。6区東部の厚さが薄いのは、2層の下部に灰褐色粘質土が嵌入堆積していたからである。7区の2層は西部が20cm、東部が17cmと東に向かってやや薄くなる傾向を示していたが、堆積そのものは安定していた。8区は平均して18cmの厚さで、9区は西部が18cm、東部が16cm、10区は西部が17cm、東部が11cmと、おむね東部が薄く、西部に行くに従って厚くなっていたが、安定した堆積を示していた。7区2層の淡褐色粘質土は、3層の淡黄褐色粘質土の地山上に堆積しており、遺物包含層となっていた。

3層は灰褐色粘質土で、4区と5区の2号溝状遺構から6区にかけてのみ堆積していた地層であり、他の部分には認められない。4区では3層を幅120cm、深さ10cmで鍋底状となるように掘り込み、そこには黒褐色ブロック土を含む、ねずみ色粘質土が堆積していた。6区では厚さ20cmとなり、5区と6区の境に段差があり、凹凸が認められた。

4層は淡黄褐色粘質土の地山であり、5区の大半と7区より東部は3層が地山となっていた。検出した遺構はすべて地山を掘削して構築していた。2号・3号溝状遺構は、2層下面から3層を掘り下げて構築していた。

2 検出した遺構と出土遺物

検出した遺構は、弥生時代の住居跡1棟と掘立柱建造物跡2棟、土坑2基、溝状遺構1条、大溝1条、古墳時代とみられるぬるめ遺構とそれに伴う溝状遺構1条、他の溝状遺構2条、土坑3基、集石遺構2基と若干の柱穴、それに中世の溝状遺構1条である。

ここでは、グリット別に取り上げて説明を加えたい。

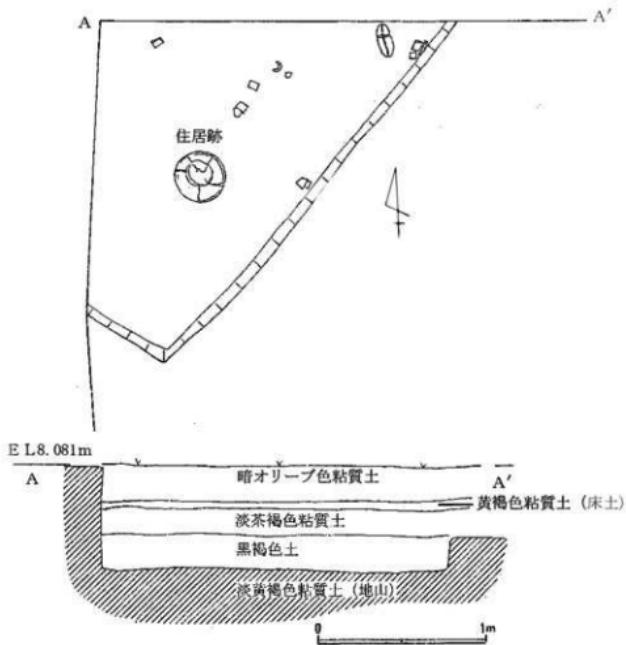
(1) 住居跡と出土遺物

(1) 住居跡(第8図)

0区西隅で検出した住居跡であるが、発掘したのは1/4の面積であり、3/4は調査地域外であった。発掘した住居跡面積は2.56m²で、4層の淡黄褐色粘質土を20cmの深さで掘り込んでいた。住居跡上の堆積層序は、厚さ21cmの1層の暗オリーブ色粘質土の下部に、厚さ3cm前後の黄褐色粘質土の水田床土が水平に堆積していた。水田床面下には厚さ12cmの淡茶褐色粘質土があり、その下部に厚さ20cmの黒褐色土が堆積していた。この黒褐色土は住居跡内の埋土に相当する。住居跡床面は地山となっていた。

住居跡の南隅の掘り込みが直角であることから、方形プランの住居跡とみてよい。住居跡の主軸方向はN-4°-Eを指向しており、大溝遺構とはほぼ同じである。住居跡内の埋土は黒褐色土の單一層であり、調査した住居跡内の床面には柱穴や炉跡は存在しなかった。

住居跡内から浅鉢の完形品1個と、北隅付近から石錘1個が出土した以外は、すべて弥生土



第8図 住居跡平・断面図

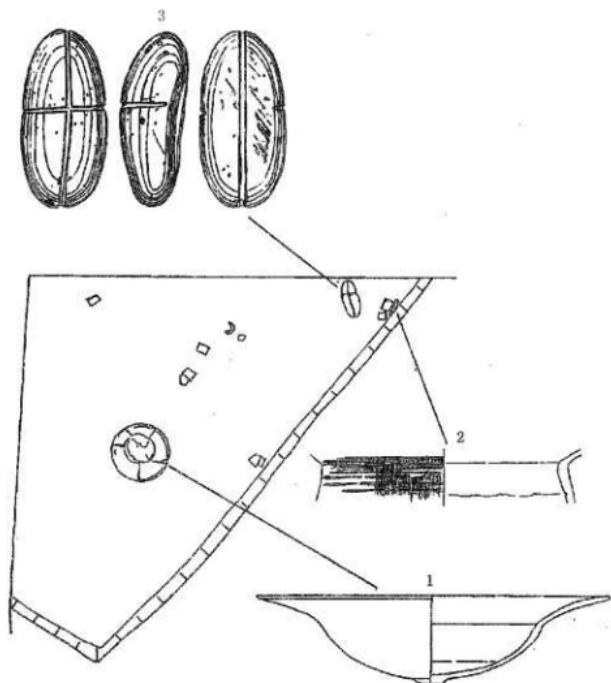
器の細片だけであった。遺物は床面上7~11cmからの出土であったが、流れ込みではない。床面からの遺物の出土は皆無であった。住居跡の豊穴の掘り込みの深さが20cmであることから、住居跡に伴った遺物とみてよかろう。住居跡は出土した遺物から弥生時代後半とみておきたい。

(2) 出土遺物

床面上7~9cmから若干の弥生土器片が出土したが、その大半が細片でかつ脆く、取り上げることさえ困難であった。実測可能な破片は浅鉢を除くと1点だけであった。

① 弥生土器（第10図の1・2）

1は、住居跡の南部床面上11cmから伏せた状態で出土した浅鉢であり、口径26cm、器高5.2cmの断面が乳房状をしており、体部と口縁部の境が外に向かって大きく屈曲して外反し、底部は直径1.7cmの丸みをもった円盤状平底である。外内面とも摩滅が激しく調整手法は不明

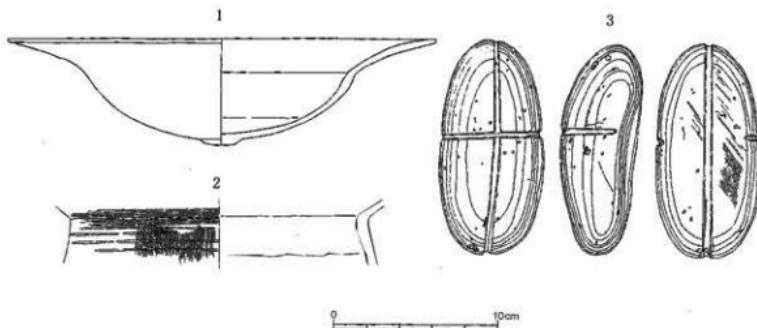


第9図 住居跡内の遺物の出土状況

である。時期は弥生時代後期末の、松山平野の第V様式第5型式に納まる。2は甌の頸部から上胴部にかけての破片である。口縁部は「く」字状に外反し、上胴部の外面は平行叩きで整形し、その上をシャープな細い櫛で消去している。底部は不明であるが、横田遺跡I区とII区から同じ甌が出土しているので、第V様式第5型式としておきたい。

②石錘（第10図の3）

3は住居跡の北部の床面上6cmから出土した磨製の有溝石錘である。長さ13cm、最大幅6.3cm、厚さ4.7cmで長円形をしている。長軸中央部に幅2.5mm、深さ2mmの溝が一周しており、上部から3cmの短軸の表面上に十字に直交する同じような溝をもっている。短軸面だけは表面のみに溝があり、裏面には存在しない。全面研磨しており、石質は粗面岩質安山岩で白褐色をしている。同じ有溝石錘が伊予市行道山からも出土している。このほか同じ材質の有溝石錘が横田II区3号河川跡と片山H区から出土しており、松山平野南部では中期末から後期にかけて



第10図 住居跡出土の遺物

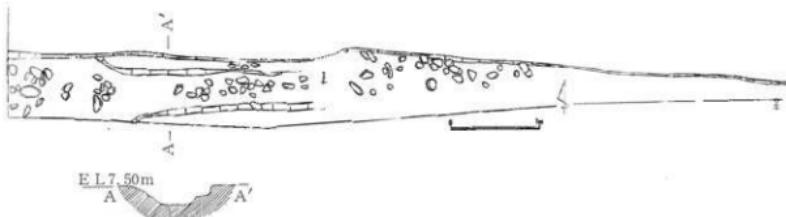
比較的多い。

〔2〕1号溝状遺構と出土遺物

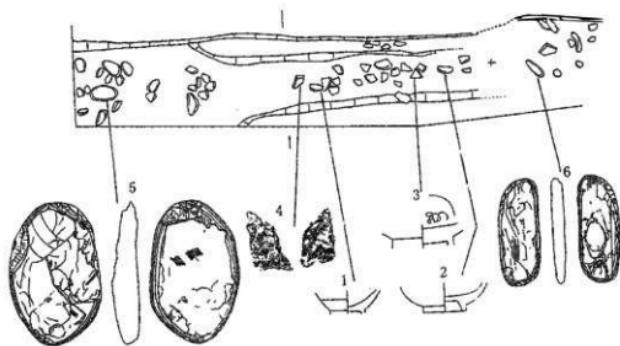
（1）1号溝状遺構（第11図）

1号溝状遺構は5区の西端南部からはじまるが、3区の中ほどから2区の中ほどまでの間は、南部の調査地区外に姿を消し、2区の中ほどから少し現れ、1杭付近で幅8.2cm、0区西端で幅8.3cmとなっている。発掘した推定長は24mであるが、更に東西に延びているのは確かである。0区中央部の溝幅は9.0cmと広くなり、その中央部の幅5.0cmが一段低くなり、河岸段丘状となっていた。溝の主軸方向はN-87°-Wを指向し、深さは中央部が2.2cm、両岸が1.1cmであった。溝の床面はほぼ水平であり、1区中央より以西の床面上には、緑泥片岩の偏平な川石が意図的に敷かれていた。これらの川石は、床面の下刻作用を防ぐ目的で貼り付けたものである。

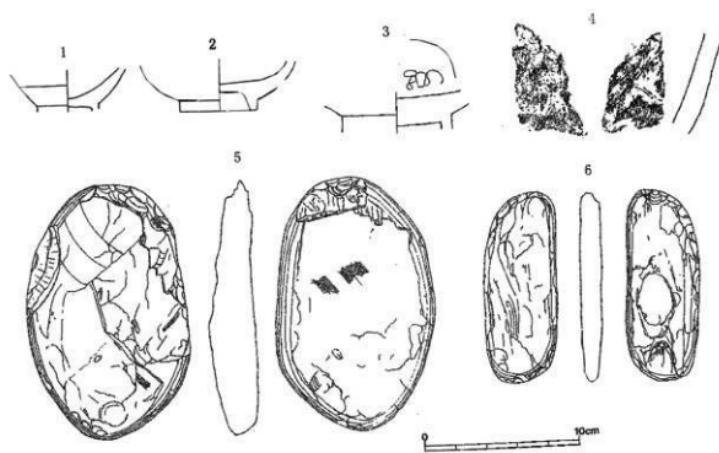
西端の溝床面上から、混在した状態で加工痕のある円碟が、0区中央の溝床面上から備前焼の甕の破片と碗の破片が、1区寄りから青磁碗の破片が出土した。1号溝状遺構中からは、こ



第11図 1号溝状遺構平・断面図



第12図 1号溝状遺構内の遺物の出土状況



第13図 1号溝状遺構出土の遺物

れら以外の遺物の出土はなかった。

(2) 出土遺物

①陶器（第13図の1・2・4）

1は底径4cmの削り出しによる高台をもつ備前焼の碗であり、4は備前焼の大型甕の胴部片で、外内面とも鉄錆色を呈している。所属時期は細片であるため不明としておきたい。2は淡緑褐色の釉薬を施した陶器碗である。底部は径5cm、高さ1.1cmの削り出し高台となり、底部から体部にかけては曲線的に立ち上がっている。

②青磁（第13図の3）

3は高台をもつ青磁碗の底部で、見込み部分に押圧文をもっているが、押し潰されて文様は不明である。龍泉窯系の青磁碗であろう。

③石器（第13図の5・6）

5は長さ16.5cm、幅11cm、厚さ3cmの長円形で、一面は剥離面が残り、他的一面に自然礫面が残る緑泥片岩の偏平な川石であり、両面の一端に人工的な剥離痕が残存する石杵状石器である。6は長さ12.5cm、幅4.6cm、厚さ1.3cmで、両端が丸みをもっている。石質は緑泥片岩で、両端と一側端面に剥離痕が残存しており、5と同様の石杵的用途が考えられる。

(3) 1区出土の遺物（第14図の1・2）

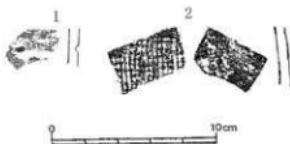
1区から遺構に伴わずに出土した遺物はわずかで、実測可能なものは2点である。1は地山直上から出土した土器の細片で、暗褐色を呈し、胎土中に微細な花崗岩粒を含み脆い。外面は横に走る沈線文を1本巡らしており、縄文後期の土器の可能性が高い。2は3層の黒褐色土中出土の須恵器片である。外面は木目を利用した平行叩きで整形しており、やや軟質である。内面は同心円当て具跡を指揮で丁寧に消去しており、初期須恵器の可能性の高いものである。

(4) 1号土坑と出土遺物

(1) 1号土坑（第15図）

2区の北隅で検出した土坑であるが、北半分は調査地区外であった。1号土坑は東西の法面上の長さ94cm、床面上の長さ84cmで、南北の長さは58cmであることから、直径は95cm前後、深さが50cmの円形土坑と推測可能である。

1号土坑の堆積層序は、1層が厚さ10~12cmの暗オリーブ色粘質土の表土であり、2層は厚さ7~8cmのねずみ色粘質土の水田床土である。3層は淡茶褐色粘質土で、東部が厚さ14cm、西部が18cmと西に行くに従って厚くなっている。4層は黒褐色土で、土坑外では厚さは20cmであるが、土坑内の東部は深さ20cmまでは黒褐色土が埋土として流入していた。土坑内西部の法面下20~50cmの間は、灰褐色粘土が流入堆積していた。円形土坑そのものは淡黄褐色粘質土の地山を深さ50cmまで掘り込んで構築していた。



第14図 1区出土の遺物

土坑中に弥生土器の細片と緑泥片岩の川石が遺存していただけである。その遺物も土坑中の埋土である黒褐色土の下限面からの出土であり、最下部の埋土である灰褐色粘土中に遺物はなかった。

遺物は土坑中央部の法面下5~17cmに集中していた。土器片のうち、法面下17cmと最も深い場所から出土した土器片は、弥生前期初頭の甕の一部であり、中央部の法面下1

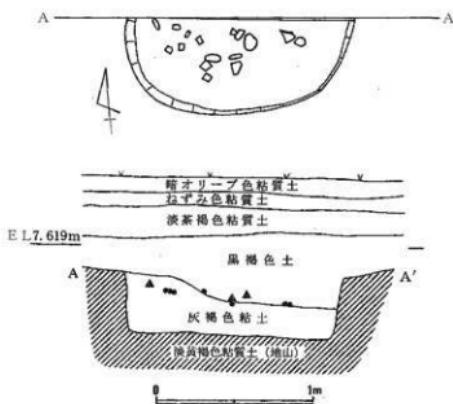
1cmからは弥生後期の壺の底部が出土した。この他、加工痕の残る川石や磨製石鏃の未成品、磨製石斧片、剥片などが出土したが、これらはすべて緑泥片岩製である。

ただ、1点だけサヌカイトの剥片が含まれていた。土坑中の出土遺物が弥生時代であることから、本土坑は弥生時代後期のものと理解しておきたい。

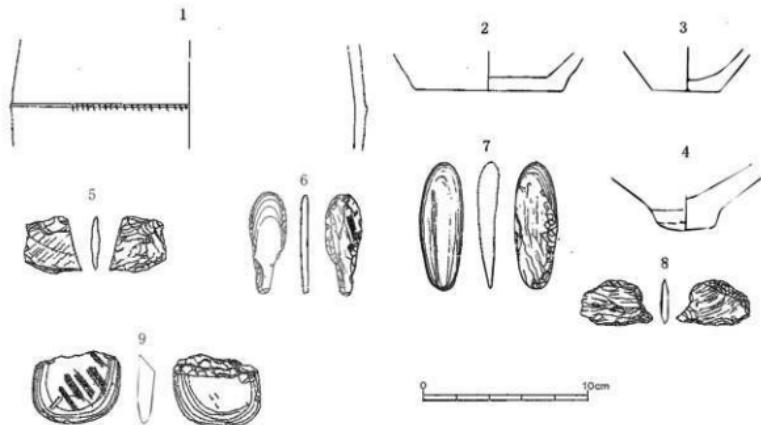
(2) 出土遺物(第16図の1~9)

1は法面下17cmから出土した最大胴径が23cmの甕の胴部片であり、最大胴部に稜状の削り出し凸帯を巡らし、その上に笠割み目を施している。色調は暗褐色で、胎土中に花崗岩粒を含んでいる。外面に笠研磨の跡が若干残っており、第I様式第1型式に納まる甕片である。2は1の底部とみてよく、底径9cmの平底である。3も底径4cmの甕の底部で平底である。4は底径3.5cmの丸みをもった円盤状の平底であり、弥生後期末の土器である。5は残存長3.4cm、残存幅3.2cm、厚さ0.4cmのサヌカイトの剥片である。6は長さ5.5cm、幅1.2cm、厚さ0.4cmで、中子部分が細くなっている。外面は研磨し、周縁部の側端を小さく剥離し、内面は剥離面がそのまま残る緑泥片岩の磨製石鏃の未成品である。7は長さ7.5cm、幅1.6cm、厚さ1.2cmの細長い緑泥片岩の川石で、裏面は剥離面が残り、その一側端を剥離調整している。8は緑泥片岩の剥片で、9は残存長4cm、幅5cm、厚さ1cmの刃部が半円形をした緑泥片岩の磨製石斧状石器であり、刃部から4cmのところで破断している。

本土坑中からは弥生土器とともに川石や石器が出土したが、後の緑泥片岩とサヌカイトは横田周辺には存在しない石であり、緑泥片岩は双海町海岸から、サヌカイトは香川県からの搬入品とみてよい。



第15図 1号土坑平・断面図



第16図 1号土坑出土の遺物

(5) 2区出土の遺物

2区の4層の黒褐色土中から出土した遺物である。1号土坑の南部を中心に出土したが、数量的には少ない。出土遺物としては亀山焼の甕の破片と弥生土器片3点、それに抉りのある石器と砥石3点である。

(1) 土師質甕（第17図の1）

亀山焼の甕の頸部であり、2区南西隅の1号溝状遺構の北20cmから出土した。色調は暗褐色を呈し、外面は格子目叩きで、内面は同心円当て具跡を指撫でで丁寧に消去している。外面の格子目叩きの上には煤が付着しているので、煮炊き用の甕として使用していたようである。

14世紀を前後する時期とみておきたい。

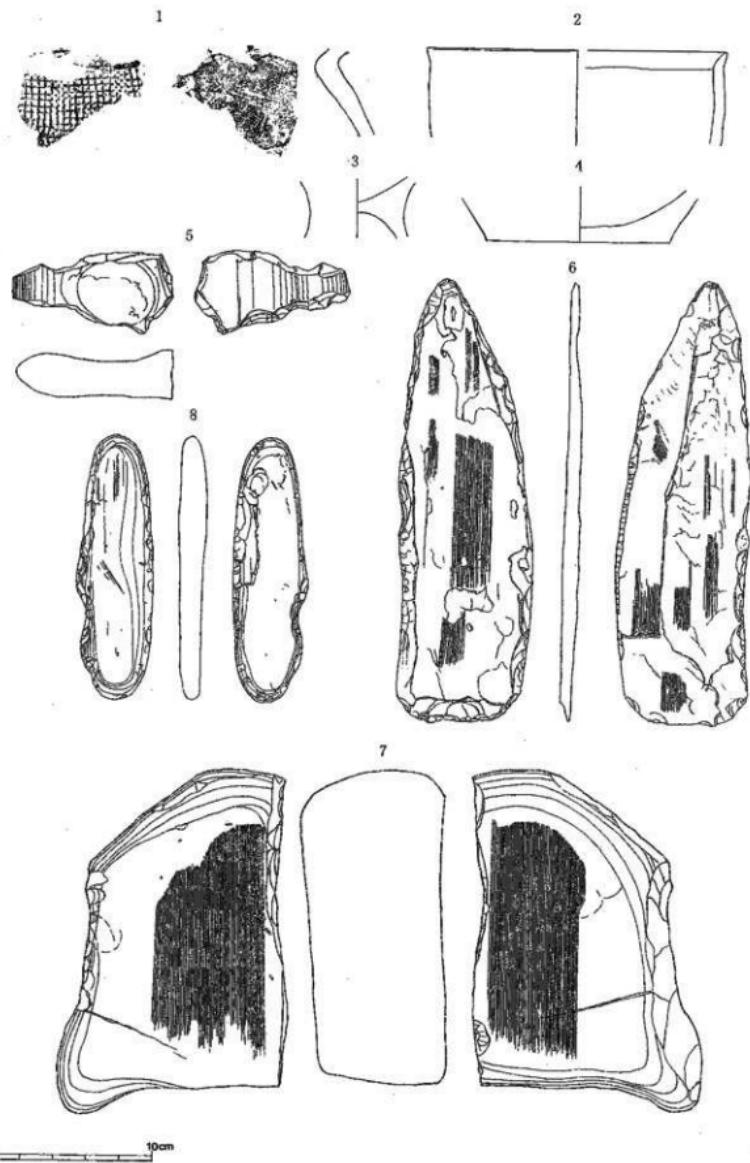
(2) 弥生土器（第17図の2～4）

2は1号土坑の東30cmの地面上から、3は2の南13cmから出土した土器である。2は口径18cmで、口縁部は直立するものの心もち鋤先状に外反し、口縁端は尖りぎみとなっている。色調は明褐色でやや脆く、胴部の膨らみはほとんどみられない。4は底径11cmの壺の底部で、平底である。2・4は器形や胎土などから弥生前期の土器の可能性が高い。3の高壺の壺底部から上脚部にかけての破片は、1号土坑の南西50cmの地点から出土した。色調は淡紅褐色で、脆くて摩滅が激しい。器形や胎土などから弥生後期末の高壺の一部と推定しておきたい。

(3) 石器

石器は砥石状石器が3点と抉りのある石器が1点出土した。

① 砥石（第17図の5～8）



第17図 2区出土の遺物

5は1号土坑の南70cmから出土した砥石か石皿の破片である。厚さ2.9cmで中央部が使用によって1cmほど凹んでいる。石質は硬質砂岩で、砥石としてもよいが、石皿として使用された可能性も否定できない。6は1号土坑の南2.4mの地点から出土した長さ26.4cm、基部幅7.7cm、厚さ0.9cmの、先端が触先状に尖っている縫泥片岩の偏平な石器である。周縁を片側から剥離調整し、片面をわずかに研磨しているので、砥石として使用した可能性も残るが、片側面に細い糸の切り込み跡が平行して残存しているので、織物用の糸を巻く駒として使用した可能性の方が高い。7は1号土坑の南西1.5mから出土した和泉砂岩の川石を利用した砥石である。残存長18cm、残存幅14cm、厚さ8.2cmで、半分に割れた残りの部分である。割れた面以外は川石の礫面が残っており、表裏面が使用により摩滅している。8は1号土坑の西30cmから出土した縫泥片岩の川石を利用した抉りのある石器である。長さ16cm、幅4.4cm、厚さ1.4cmで、両端が丸く細長い。周縁全体に剥離調整痕があり、片側の1/3の部分に剥離による抉りを施している。

〔6〕2号土坑と柱穴群（第18図）

3区のはば中央部に2号土坑が所在した。2号土坑は法面上の長さ150cm、床面上の長さ120cm、法面上の幅116cm、床面上の幅88cm、深さ34cmの梢円形で、主軸方向はN-11°-Eを指向している。土坑中の埋土の堆積は乱れており、床面は鍋底状となり、底部に淡オリーブ色細砂質土が13cmの厚さで堆積していたが、上面は凹凸が激しい。法面下には厚さ8cmの淡オリーブ色粘質土が堆積していたが、東部は17cmと深くなっていた。中央部には宙水状に厚さ14cmの黒褐色土が混在するオリーブ色粘質土が堆積していた。

2号土坑の南法面上にP1、南30cmにP2、55cmにP3の小柱穴があった。P1は直径13cm、深さ4cm、P2は12×16cm、深さ8cm、P3は直径18cm、深さ6cmの柱穴であった。これらの3本の柱穴は、2号土坑に伴ったものかどうかは明らかでない。土坑の埋土中からの遺物の出土は皆無であり、周辺からの遺物の出土もない。そのため2号土坑の所属時代を決めかねるが、1号土坑の存在から弥生時代後期末の可能性を指摘しておきたい。

〔7〕2号溝状遺構

2号土坑の南東15cmに所在した東西長110cm、幅40cm、深さ5cmの小さな溝状遺構である。主軸方向はN-86°-Wを指向し、南50cmには1号溝状遺構が延びている。溝中からの遺物の出土はなかった。恐らく、1号溝状遺構に伴った畠溝の一部であろう。時代も南北朝から室町時代としておきたい。

〔8〕3区・4区出土の遺物

3区と4区の黒褐色土の遺物包含層中から遺物が出土したが、遺構に伴ったものではない。

（1）弥生土器（第19図の1・2）

1は3区北端から出土した底径9cmの平底の甕底部である。底部と体部の境はシャープで、角のある花崗岩粒を多く含み、脆くて暗赤褐色を呈している。外内面は摩滅が激しい。時期は前期の可能性が高い。2は4区西隅から出土した甕の頸部から上胴部にかけての破片である。茶褐色で角のある微細な花崗岩粒を含む、脆い後期の甕である。

(2) 須恵器 (第19図の3・4)

3は2号溝状遺構の東50cmから出土した須恵器片で、外面は平行叩きを格子目状に交差させるように付け、内面は同心円当て具跡で整形している壺の胴部片で、東接する大溝遺構に伴った須恵器片であろう。4は3区南東隅の1号溝状遺構に接する地点から出土した土釜か土鍋の足の一部である。

(3) 陶磁器 (第19図の5・6)

5は2の南に接して出土した甕の口縁部である。口径は21.5cmで、口縁部は外に向かって逆「L」字状に折り返され、口縁端が0.5cmの高さで立ち上がっている陶質の土鍋の口縁部であり、鉄錆色をしている。6は2号溝状遺構の南30cmの1号溝状遺構に接して出土した磁器碗で、底径7cmの削り出し高台をもっている。高台の高さは0.55cmで、高台底以外は淡青灰色の釉薬がかかっているが、産地は不明である。

(4) 石器 (第19図の7・8)

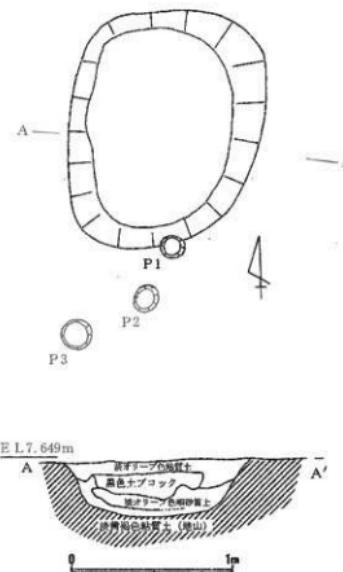
7は3区中央部の北端から出土した石核である。長さ8.5cm、幅5.5cm、頭頂部幅2.6cmで、

断面は楔形となっている。片面は川石の礫面が残るが、頭頂部にはバルブ痕があり、片面は貝殻状の剝離痕が顯著に残っている。石質は風化した安山岩である。風化した安山岩の川石を剝離加工した石器は、横田遺跡I区やII区の弥生後期の遺構に伴って多く出土している。8は2号土坑の北80cmから出土した長さ15cm、幅4.7cm、厚さ1.9cmの緑泥片岩の川石である。

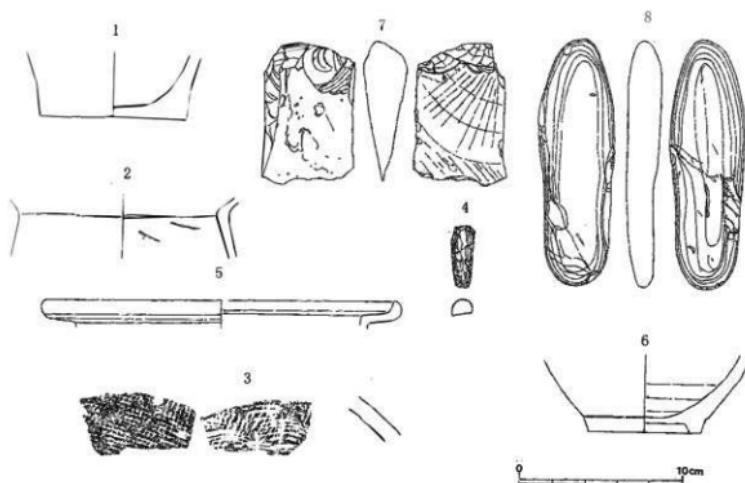
〔9〕 大溝遺構と出土遺物

(1) 大溝遺構 (第20図)

大溝遺構は4区全体に及んでおり、3区南東隅と5区北西部の一部にもかかっている。4区で検出した大溝遺構の長さは4m、幅4mで、両岸の地山法面上からの深さは194cmで、掘削当時の地表面からの深さは210cmはあったとみてよい。地山を深さ194cmまで掘削した大溝であり、床面は鍋底形であったが、斜面の傾斜からみると断面はV字状であった可能性が



第18図 2号土坑平・断面図と柱穴群

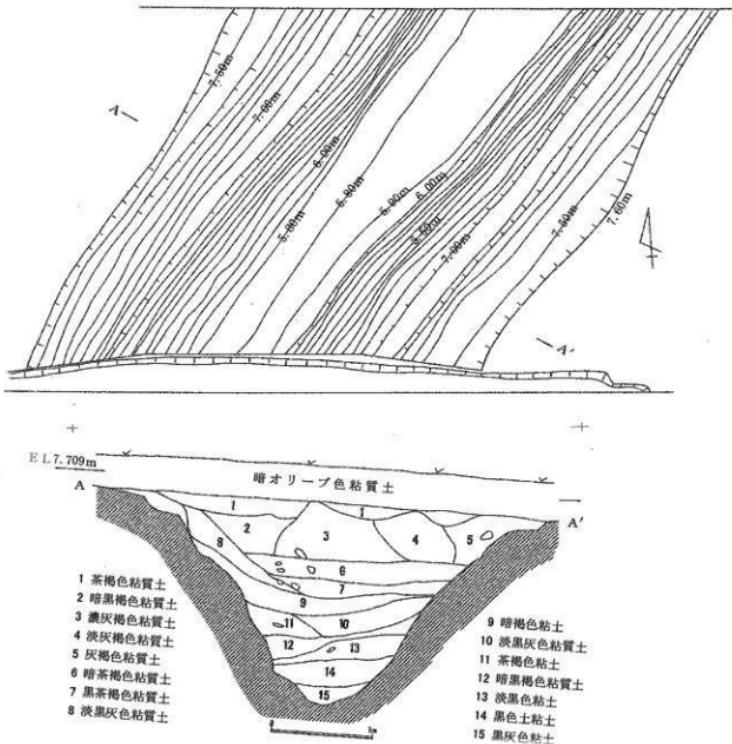


第19図 3区・4区出土の遺物

高い。大溝の側面に現れた地山の色調は、深さ100cmまでは茶褐色粘質土であったが、深さ100～150cmまでの間は黄褐色粘質土となり、それ以下は青灰色粘質土となっていた。

大溝中の埋土の堆積は、深さ50cmまでは西部が暗灰褐色系であり、東部がやや淡い色調を呈していたが、明確に線引きできる状態ではなかった。50cm以下になると西側に若干の流れ込みを示す地層の乱れが認められたが、上部は茶褐色、下部は黒褐色土系の地層が比較的安定した状態で堆積していた。全体的にみると中空になった状態での堆積であることから、両岸から流入堆積したものとみられる。大溝の主軸方向はN-42°-Eを指向しており、溝中の水は南西から北東方向に流れている。現在の遺跡周辺の河川や溝は南から北に向かって流れている。

大溝の法面上から多くの須恵器の細片が出土し、両岸のラインの検出から、発掘当初は古墳



第20図 大溝遺構平・断面図

時代の住居跡ではないかと想定した場所である。遺物は法面上から深さ110cmまでにほとんどが集中しており、大溝中全面にわたって出土したが、すべてが細片であり、復元可能な土器は皆無であった。上部から出土した遺物の大半は須恵器片であったが、下部は弥生土器片だけで、須恵器片はまったく混入していなかった。弥生土器片の下部からオギの炭化遺体に混じって、木片や加工木が出土した。上部の須恵器片の出土状況は、大溝遺構周辺から流れ込んだのかも知れない。

(2) 出土遺物

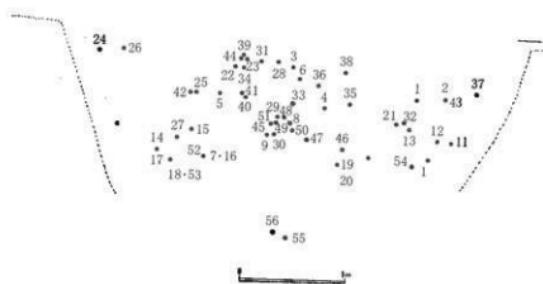
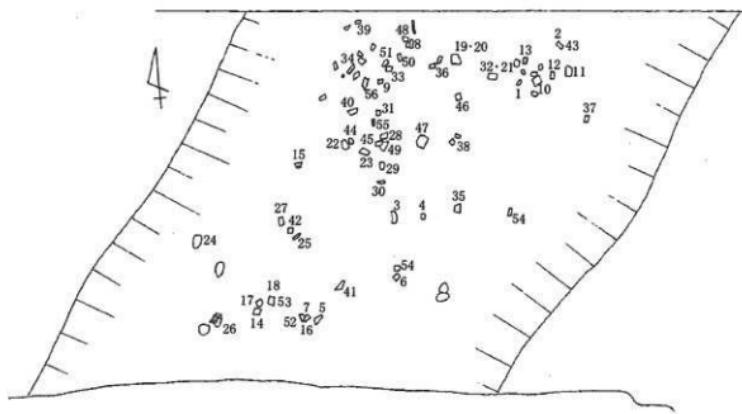
出土した遺物は、須恵器、土師器、弥生土器と各種石器、それに緑泥片岩の川石である。土器片は先に触れたごとくすべて細片で、実測可能な土器片はほんのわずかであった。

①須恵器（第22図の1～6、第25図の31～51）

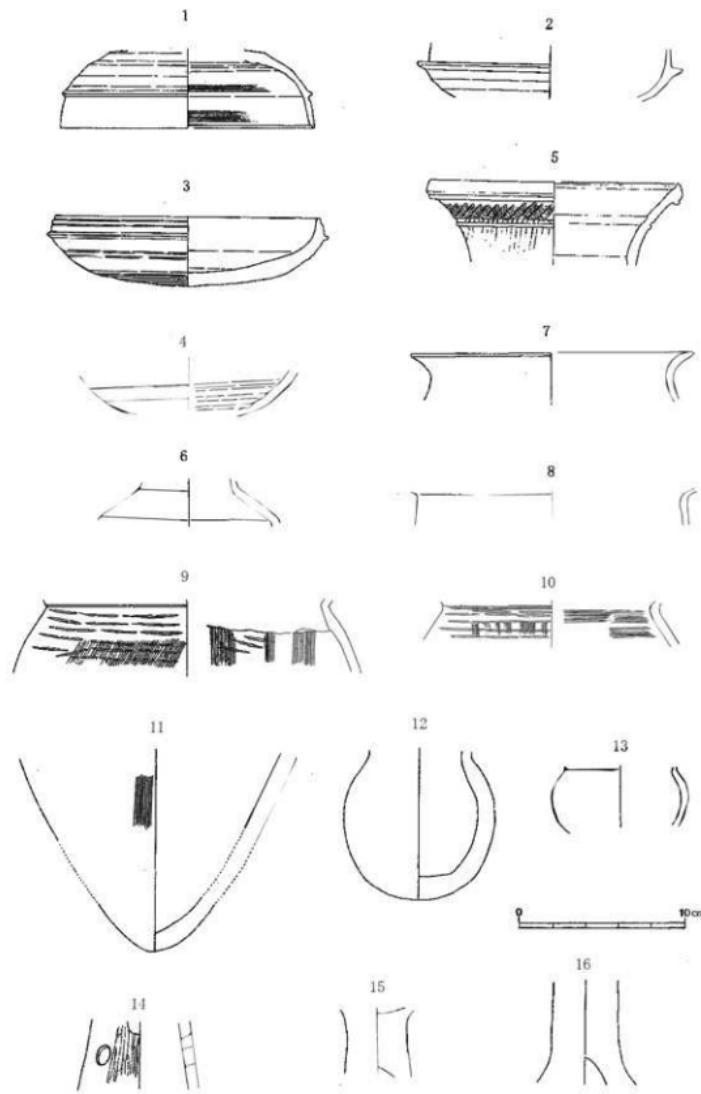
1は-50cmから出土した口径15cm、推定器高4.7cmの蓋壺である。天井部と体部の境に鋭い段からなる稜をもち、体部はわずかに外反しながら垂下し、口縁端は二段となっている。天井部は回転笠削りで整形し、青灰色でやや軟質である。陶邑須恵器編年に対応させるとTK208型式に近いようである。2も-50cmから出土した壺身の受け部部分で、受け部の胴径14.5cm、受け部径16cmで、受け部が幅0.8cmで水平に開いている。口縁部は不明であるが、底部は回転笠削りで整形しており、淡青灰色でやや軟質である。3は-27cmから出土した口径16cm、器高4.1cmの壺身である。口縁部と体部の境には小さな突出する稜があり、口縁部は曲線的に立ち上がり、口縁端は丸く納めている。底部は回転笠削りの上をカキ目状の櫛で消去している。紫赤灰色を呈し堅牢で、TK209型式に併行する壺であろう。4は-66cmから出土した壺身の底部で、回転笠削りで整形し、内面には大きな同心円当て具跡がよく残る灰白褐色の窯変須恵器であり、軟質である。5は-56cmから出土した口径15cmの広口壺の口縁部である。漏斗状に外反する口端部の口縁端は丸く肥厚し、口縁端面は立ち上がり尖っている。口縁部中央外面には凹線文と高さ0.5cmの丸い凸帯を巡らし、その上部に多重の櫛による波状文を、下部は荒い櫛の上を指撫でて消去している。青灰色を呈し、堅牢であり、TK217型式に比定可能な須恵器壺である。6は-40cmから出土の小型壺の上胴部片で、最大胴径が上胴部にあり、底部が急に絞められている。色調は淡ねずみ色で、やや軟質である。

31～51は各種須恵器の破片の拓影である。39は-17cm、44は-24cm、38は-30cm、36と37は-45cm、43は-52cm、42は-58cm、40は-60cm、35は-60cm、49は-82cm、50は-88cm、51は-82cm、からの出土である。外面は38の提瓶の胴部がカキ目、41の壺が細くシャープな櫛目以外は、すべて角度を変えた平行叩きで整形している。内面は同心円当て具で調整しているが、32・33・35・42・44・49～51は同心円当て具跡を丁寧に指撫でて消去しており、48は同心円当て具跡がわずかに残っている。36～39・43・44は58cmより浅い地点からで、他はそれより深い地点からの出土で、若干先行する可能性がある。ともにやや軟質であり、時期的には初期須恵器の可能性を秘めている須恵器群である。

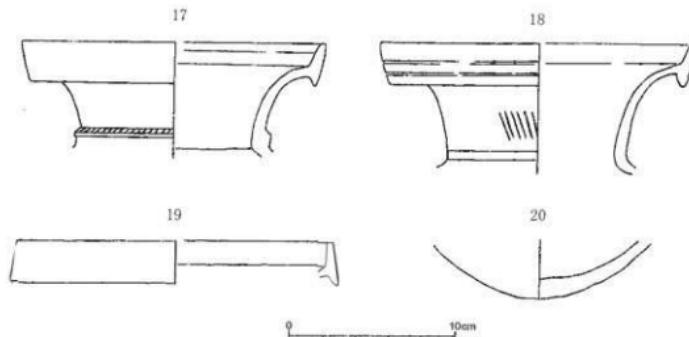
②弥生土器（第22図の7～16、第23図の17～20、第26図の52～54）



第21図 大溝遺構内の遺物の出土状況



第22図 大溝遺構出土の遺物（1）



第23図 大溝遺構出土の遺物（2）

弥生時代後期末から古墳時代への移行期の土器で、古式土師器の範疇で捉えることができるものも若干含まれている。弥生土器は、主として-70cmより深い場所から出土しており、上部の須恵器よりも層位的に先行する。

7は-117cmから出土した甕の口縁部で、口径17cm、口縁部が曲線的に外反し、口縁端面を丸く納めている。器厚は0.4cmと薄手で、橙褐色を呈し、安山岩粒と砂岩粒を含み脆い。外内面とも剥離が激しく、文様は不明である。8は甕の上胴部片で、-80cmから出土した。淡橙褐色で、微細な花崗岩粒を含み脆く、外内面とも摩滅が激しい。9・10は胴部がやや膨らむ甕の上胴部で、9は-95cm、10は-108cmから出土した。外内面とも平行叩きで整形したあとを軽く指撫でし、その上を更に斜めや縦の細い櫛で調整している。11は尖底状の丸底を呈する甕の底部で、-90cmから出土した。赤褐色で大きな砂岩粒や安山岩粒を含み、厚さが1.1cmある厚手の土器である。甕は弥生後期末とみておきたい。

12は-90cmから出土した胴部が球形で丸底の小型壺であり、口縁部は欠落している。最大胴径は9.2cmで、赤褐色で角のある花崗岩粒を含み脆い。器厚は1.1cmと厚く、外内面は摩滅している。13は-80cmから出土した小型壺の胴部で、最大胴径が8.2cmの玉葱形をしている。灰褐色で角のある花崗岩粒を含み脆く、外内面は摩滅している。口縁部と底部は欠落しているが、底部は丸底とみてよからう。14は-115cmから出土した高坏の脚上部である。明褐色で、円形の透かしをもっており、外面は縦籠研磨で調整し、角のある花崗岩粒を若干含んでいる。15は-90cmから出土した高坏の坏底部から脚上部にかけての破片である。脚上部径は3.6cmで、橙紅色を呈し、脆く、全面が大きく摩滅している。16も-116cmから出土した高坏の上脚部である。上部は径4cmの筒形をし、橙褐色で、微細な安山岩粒を含み脆い。高坏のうちの14は、弥生後期末の範疇で捉えることができる。

17は口径18cmの二重口縁をもつ壺の口縁部で、-115cmから出土した。口縁部は漏斗

状に外反し、口縁部が2.5cm 幅で斜めに立ち上がるとともに下端は垂下し、口縁端面は平坦となっている。頸部には刻み目をもつ三角凸帯を1本巡らしている。明褐色で角のある花崗岩粒と丸みのある砂岩粒を含み脆い。外内面は摩滅が激しく調整は不明である。18も-12.2cm から出土した、口径18cmの17とはほぼ同じような二重口縁をもつ壺の口縁部であるが、若干の違いが認められる。それは上下に拡張した二重口縁面に、2本の凹線文を巡らし、頸部外面を櫛調整し、胴部と頸部の境に凸帯のかわりに2本の凹線を巡らしている。19も-11.5cm から出土した口径18.7cmの二重口縁をもつ壺の口縁部であるが、二重口縁の立ち上がりがほぼ垂直になっている。これらの壺は弥生後期末の二重口縁壺の範疇に納めることができよう。20は-11.5cmから出土した壺の底部である。底部は直径3cmが平坦状となる丸底で、橙褐色を呈し脆く、外内面とも剥離が激しい。土師器壺に移行する前段階の壺であろう。

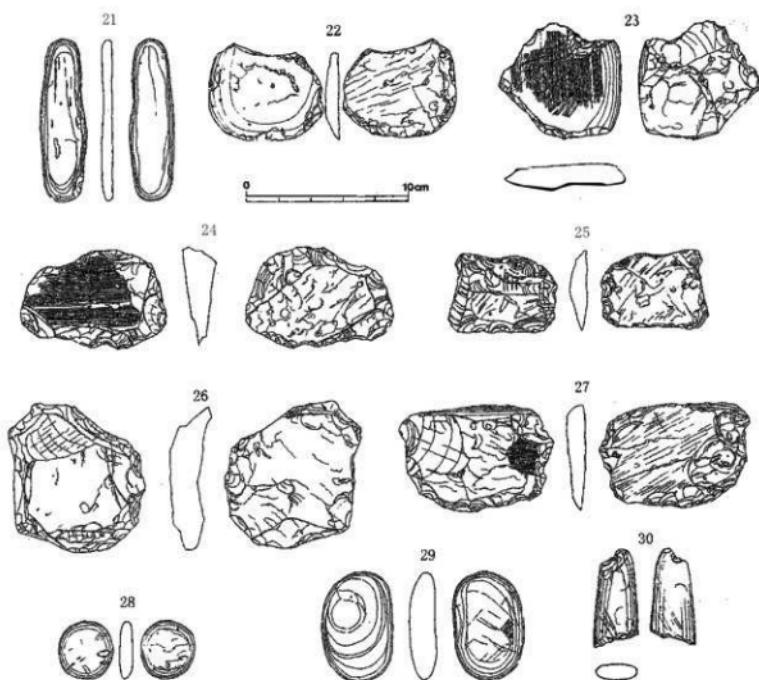
52は-11.6cmから出土した壺の破片で、橙褐色を呈し脆く、外内面とも摩滅が激しい。53は-12.4、54は-11.2cmから出土した壺の胴部の破片で、53は外内面を櫛で調整している。54は外面を箝研磨で、内面は細いシャープな櫛調整である。両者とも明褐色で、胎土中に微細な花崗岩粒を含んでいる。胎土、焼成は弥生土器である。

大溝遺構は遺物の出土状況から見る限りでは、弥生時代後期末から古墳時代への移行期と捉えるのが妥当のようである。

③石器（第24図の21～30）

21は-7.4cmから出土した長さ10cm、幅2.6cm、厚さ0.7cmで、長軸両端が丸い緑泥片岩の川石である。長軸端の一方が使用により摩滅しているので、石杵的な使用が考えられる。22は-3.2cmから出土した石鍬状石器の破損品である。残存長6cm、刃部幅6.5cm、厚さ0.9cmで、先端部は蛤刃状を呈し、片面は剥離面そのままである。偏平な川石を縦に剥離し、剥離した面の周縁部を再剥離調整している。石質は風化した安山岩である。23は-2.4cmから出土の風化した安山岩の川石を利用した残存長7cm、残存幅7.5cm、厚さ1.5cmの砥石の破損品である。偏平な川石を半分に剥離しており、剥離面はそのままである。砥面は川石の礫面を水平に研磨して砥面としており、使用痕が顕著に残り光沢がある。

24は-2.2cmから出土の加工痕の残る風化した安山岩の川石利用の石器である。石器周縁に粗雑な剥離を施している。長さ9cm、幅6cm、背部の厚さ2cmで、断面は楔形を呈しており、一面は自然の礫面が残っている。石鍬か石庖丁としての使用も考えられる。25は-5.8cmから出土の石庖丁状石器で、なかほどから破損している。残存長6.5cm、幅4.8cm、厚さ1cmで、刃部、背部とも剥離調整が行われ薄くなっている。石質は風化した安山岩である。26は-1.6cmから出土の礫器状の石器である。風化した安山岩を大きく縦に剥離し、その片面端の周縁を大きく剥離している。長さ9cm、幅8cm、厚さ1.8cmで、裏面は剥離面がそのまま残っている。石核の可能性も否定できない。同じような剥離加工痕をもつ礫器状石器が、弥生時代後期末の横田遺跡II区からも出土している。27は-10.0cmから出土の風化した安山岩の石庖丁である。長さ9.4cm、幅6.5cm、厚さ1.1cmで、断面が鉋刃状をしている。刃部、背部ともわずかに弯曲しており、片端に小さな抉りが認められる。背部には研磨のあとが残ることから、

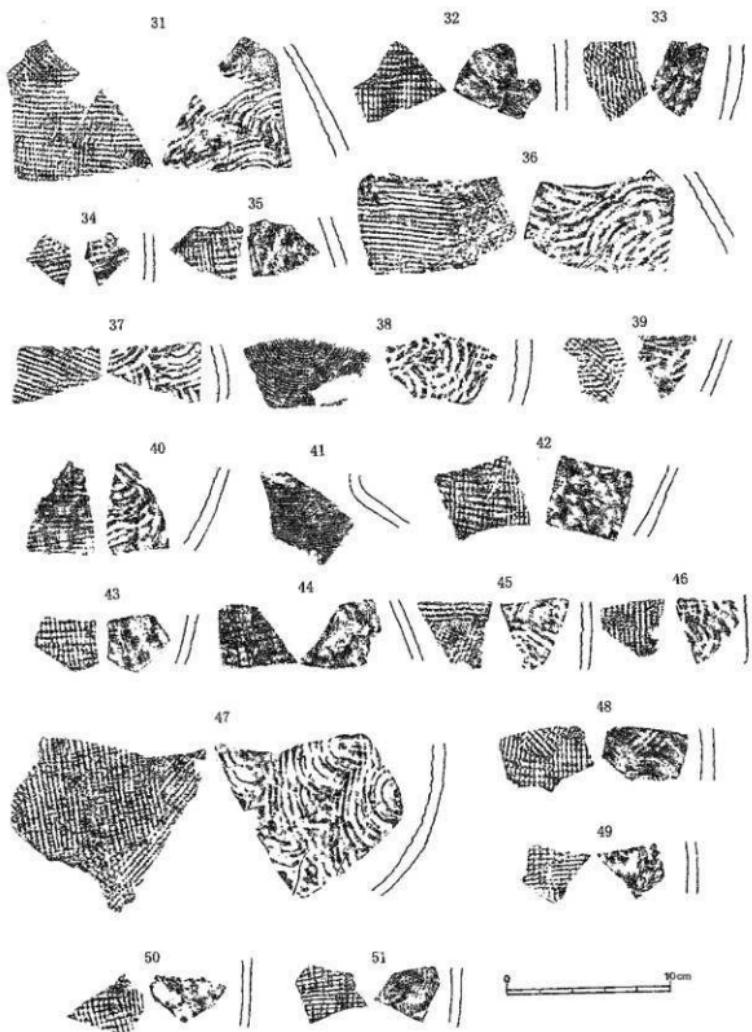


第24図 大溝遺構出土の石器

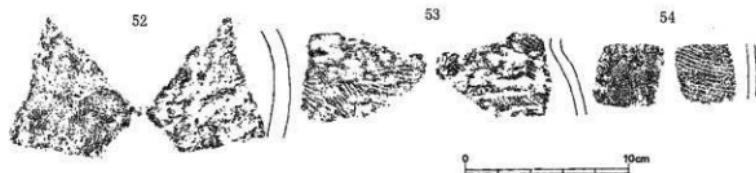
半打半磨製の石庖丁としておきたい。28は-24cmから出土の粗面岩質安山岩の円盤である。直径3.3cm、厚さ0.8cmの円盤状で、両面と周縁部を研磨している。用途は不明である。29は-7.5cmから出土の緑泥片岩の長円形の川石である。長さ6.8cm、幅4.4cm、厚さ1.6cmの円盤で、加工痕は認められない。自然の川石であるが、何らかの意図をもって横田遺跡IV区内に持ち込まれたものであろう。30は-9.0cmから出土の緑泥片岩の石斧の頭頂部とみられるものである。残存長5.5cm、幅2.8cm、厚さ1cmで、断面が楕円形をしている。全面を研磨しており、破断面は縦方向の力が加わったことを表している。

④木器(第27図の55・56)

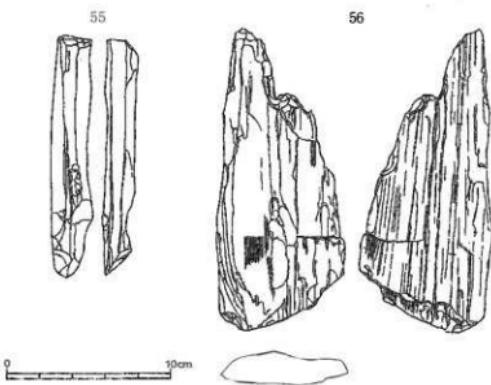
55は-18.6cmの大溝遺構床面上から出土した、断面がほぼ方形のクヌギの小杭状の木製品である。4面は凹凸なく剥離加工したままの状態で、樹皮の一部が付着していた。先端部には、片側から加えた研痕が4面残存している。残存長14.7cm、幅2.2×1.7cmである。56



第25図 大溝遺構出土の須恵器拓影



第26図 大溝遺構出土の土器拓影



第27図 大溝遺構出土の木器

は -18.3cmから出土した板状の木片である。残存長18.2cm、幅7.8cm、厚さ2cmで、両側先端部が欠損している。基部は加工痕のように見えるが、研りと断定できる跡は認められない。

55の杭状木器からすると、板状木製品の破片と見るべきであろう。材質は針葉樹である。

[10] 3号溝状遺構（第28図）

5区の東部に所在した主軸方向がN-5°-Eを指向して流れる溝状遺構である。検出した溝の長さは3.8m、法面上幅70cm、床面幅28cm、深さ13cmで、断面が鍋底状をしている。床面の傾斜は南が気持ち高くなっている、水は南から北に向かって流れているとみてよい。溝の南端から1mの地点の西側法面上から、15×10×10cmの和泉砂岩の川石が、北端の西法面下から弥生土器片が1点出土しただけである。溝は3層の淡黄褐色粘質土を掘り込み、溝中の埋土は黒褐色土の単一層であった。溝周辺や溝中から遺物の出土はほとんどなかった。

溝中からの出土遺物は、推定口径24cmの口縁部が内弯する高坏の口縁部だけであった。高坏は明褐色で角のある微細な花崗岩粒を含み脆い。松山平野の第V様式第2型式に納まるものである。

[11] 集石遺構と柱穴群

(1) 1号集石遺構(第30図)

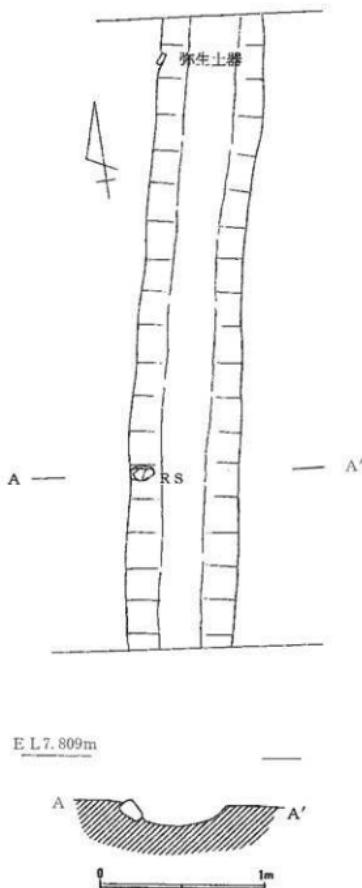
7区中央西部の3層の地山上に所在した集石遺構である。集石は大は11×15×8cm、小は鶏卵大で、大半が握り拳大であり、和泉砂岩の川石と山石が半分ずつを占め、緑泥片岩は存在しなかった。集石は長さ80cm、幅4.5cmの方形で、長軸方向を求めるN-49°-Wとなる。集石は周辺に散らばっていた石を拾い集めた状態で、何かの目的をもって構築した集石とはみられない。集石中からの遺物の出土も皆無であり、集石を除去して床面を精査したが、掘り込み等の跡は存在しなかった。

(2) 2号集石遺構(第31図)

2号集石遺構は7区の1号集石遺構の東80cmの地山上に所在した。集石の石や大きさはすべて1号集石遺構と同じであったが、東西の長さ125cm、南北幅45cmで、中心部は重なり合っているものの、西部や北部は集石が粗となっていた。長軸方向はN-87°-Eを指向していた。集石中からの遺物の出土はなく、集石下の床面にも掘り込み等の跡は存在しなかった。集石の状態も1号集石遺構と同じであった。

(3) 柱穴群

1号集石遺構と2号集石遺構の間に所在したP4-P8の柱穴群である。1号集石遺構東部の小穴は、4本とも直径5~8cm、深さ3~5cmで、埋土が灰褐色上からなっており、後世の

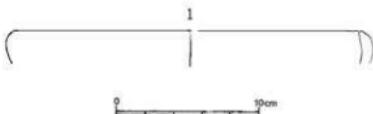


第28図 3号溝状遺構平・断面図

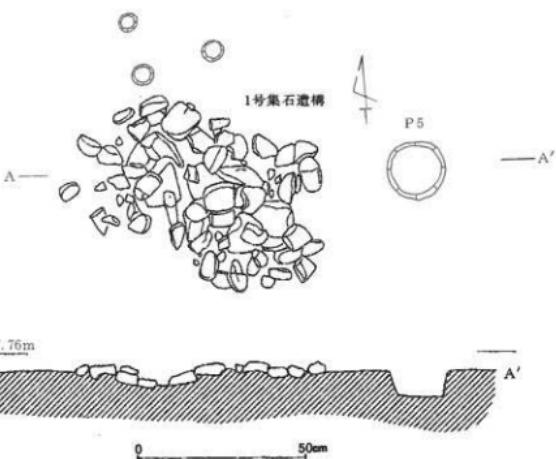
・農耕用の杭穴跡とみてよ
かろう。

P 4 は 1 号集石遺構の
南 50 cm にある直径 9 cm、
深さ 8 cm の柱穴である。

P 5 は 1 号集石遺構と 2
号集石遺構の間にある直
径 18 cm、深さ 9 cm の柱



第 29 図 3 号溝状遺構出土の弥生土器

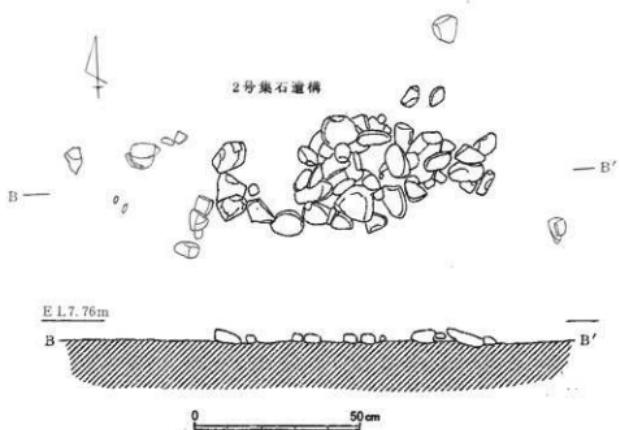


第 30 図 1 号集石遺構平・断面図

穴である。P 6 は 1 号集石遺構の南東 40 cm にあり、直径 30 cm、深さ 39 cm の大きく深い柱穴である。P 5 と P 6 の距離は 80 cm である。P 7 は P 6 の東 70 cm にあり、直径 8 cm、深さ 14 cm の小柱穴である。P 8 は P 5 の北東 70 cm にあり、直径は 13 cm、深さ 12 cm の柱穴である。これら柱穴内の埋土はどれも黒褐色土であるが、柱穴内から遺物は出土しなかった。柱穴からは建造物跡のプランを想定することはできない。ただ、P 6だけは明らかに建造物跡の柱穴である。東接して所在する 1 号掘立柱建造物跡と同じような建造物跡が、南側に存在したのではなかろうか。その北隅に相当する柱穴かも知れない。

〔12〕 1号掘立柱建造物跡（第 32 図、第 37 図の 1）

7 区中央部から 8 区中央部にかけて所在した 6 本柱の掘立柱建造物跡である。長軸方向は N - 45° - W を指向していた。柱穴のうち南端に相当する柱穴は、調査地区外にあるため検出できていないが、P 10～P 9～P 11～P 12～P 13 となる。P 9 は直径 24 cm、-27 cm、P 10 は直径 26 cm、-30 cm、P 11 は直径 26 cm、-26 cm に直径 18 cm、-36 cm の二段掘りで



第31図 2号集石遺構平・断面図

ある。P10の法面下10cmから弥生前期の甕の口縁部が出土した。P12は直径22cm、-25cmで、柱穴中から弥生土器の細片が出土した。P13は直径30cm、-27cmといずれも大きく深く、埋土は黒褐色土である。P9～P11とP10～P12の間隔は180cmと同じであり、P9～P10は230cm、P11～P12は200cm、P12～P13は190cmと若干ずれている。南部が未調査であり、不確定要素が多いが、1間×2間の建造物が想定される。時期は本遺構周辺からあまり遺物が出土していないので決めかねるが、P10中からの遺物から弥生前期の可能性が考えられる。

(13) 4号溝状遺構とぬるめ遺構(第33図)

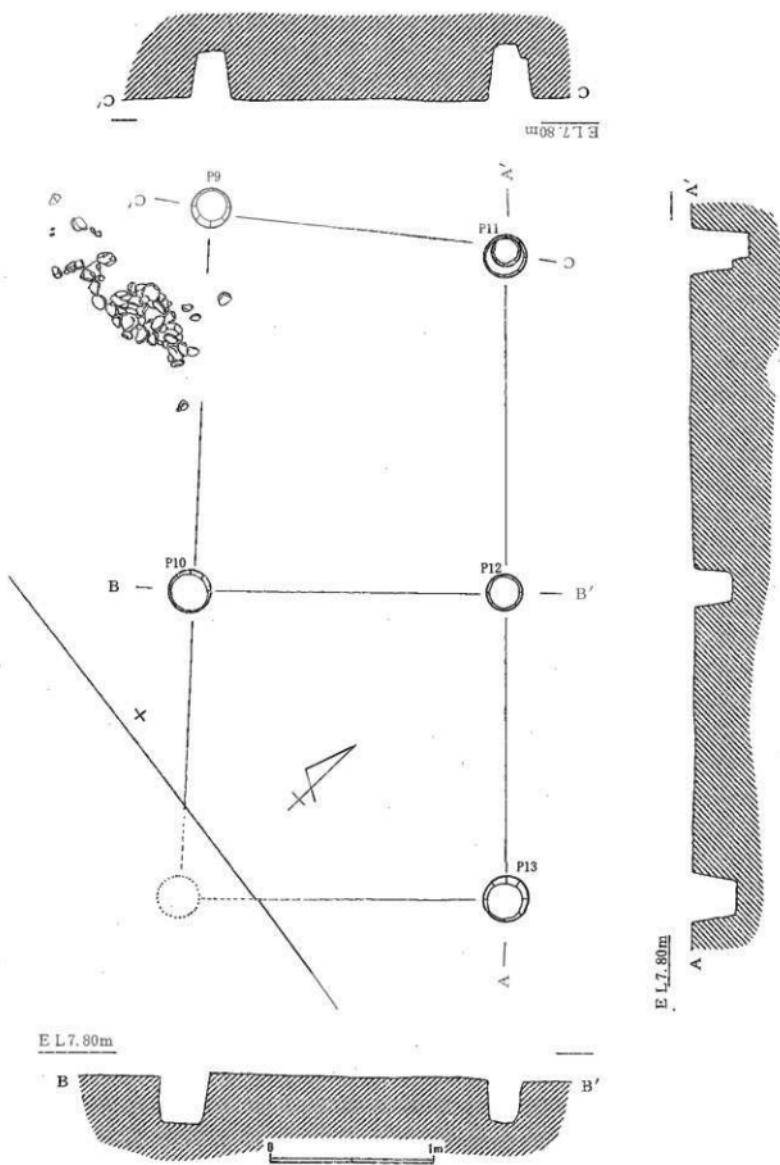
4号溝状遺構と、ぬるめ遺構とは一体をなす遺構である。

(1) 4号溝状遺構

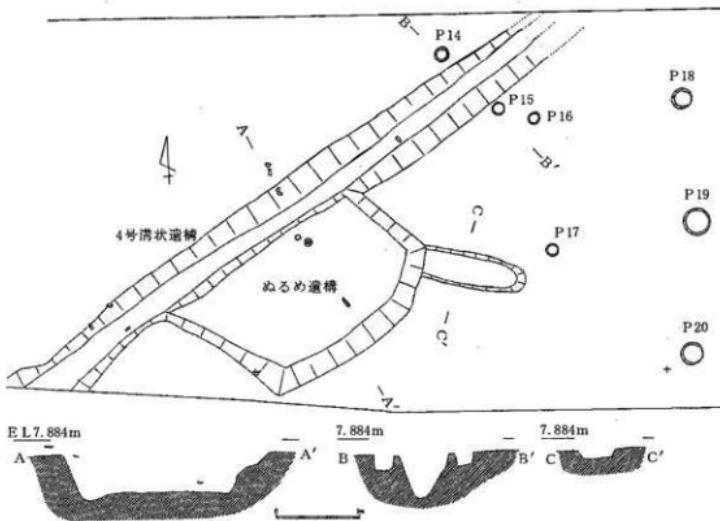
8区中央南部から9区北部にかけて所在した遺構であり、3層の淡黄褐色粘質土の地山を掘り込んで構築していた。検出した長さは8mで、幅は南部が法面上50cm、床面上20cm、北部が法面上80cm、床面上20cmと、北に行くに従って広くなっていた。深さは南部が52cm、北部が57cmと南高北低となり、主軸方向はN-58.5°-Eを指向し、水は南西から北東に向かって流れているようである。溝断面はU字状をしており、溝中の埋土は黒褐色土の単一層であった。溝状遺構の東部にはぬるめ遺構が広がっていた。

溝状遺構の埋土中から若干の遺物が出土した。南西部寄りの床面上48cmから須恵器片が、床面上40cmから緑泥片岩の川石が、北東の床面上17cmから緑泥片岩の川石が出土した。

溝状遺構の西側法面上からも若干の遺物が出土した。南西部の法面上から須恵器碗が、中央



第32図 1号掘立柱建造物跡平・断面図



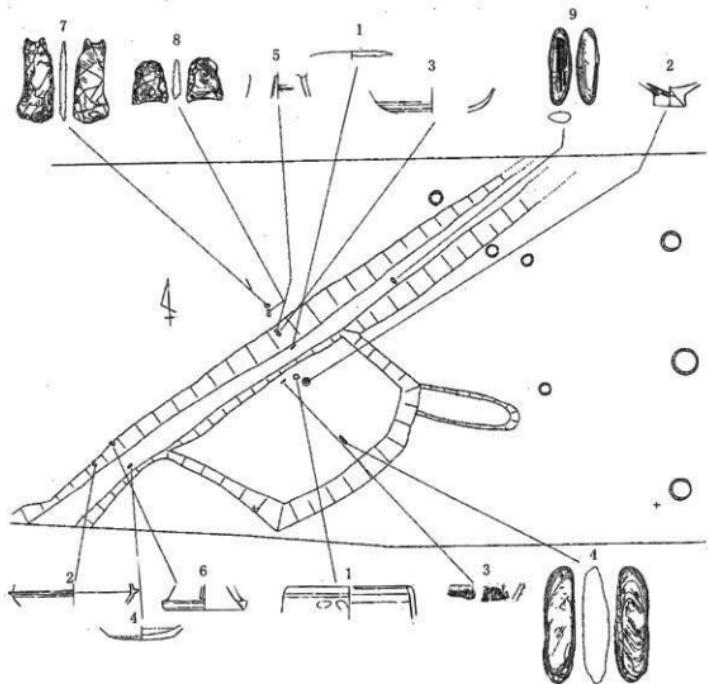
第33図 4号溝状遺構・ぬるめ遺構平・断面図

部の西側法面上から須恵器片が、この須恵器片の西20cmの地山上から石鎚と石庵丁の未成品が出土した。遺物は溝状遺構の中程以上からの出土で、下部や床面上からの出土はなかった。これらの遺物の出土状況からすると、遺物は溝状遺構そのものに伴ったものではなく、流れ込んだ状態を示していた。溝床面上に和泉砂岩の川砂が薄く堆積していたので、一時的にせよ水が流れていたことは確かであり、用水路であったことは間違いないだろう。

(2) ぬるめ遺構

用水路から水田へ水を取り入れる際、用水路の水をここで温めてから水田に水を入れるための遺構である。溝を流れる水の温度が低い場合に設けられる施設である。恐らく、水温の低い湧水を水源として利用した用水路であったからではなかろうか。ぬるめ遺構は4号溝状遺構の南西端近くの東法面に接して所在した。南部は深さ36cm、北部は50cmほど地山を掘り下げて構築していた。ぬるめ遺構の床面は、溝状遺構床面より6~7cmほど高くなっていた。ぬるめ遺構は南北長270cm、東西幅180cmの長方形に近い形状をし、床面は水平であった。遺構の北東隅には、東に延びる水口の溝が所在した。水口は長さ130cm、幅45cm、深さ10cmであった。

ぬるめ遺構中の埋土は、4号溝状遺構中の埋土と同じ黒褐色土で、その中に遺物が若干遺存した。床面中央部の東寄りの床面上10cmから緑泥片岩の石柱が、中央部の4号溝状遺構寄り



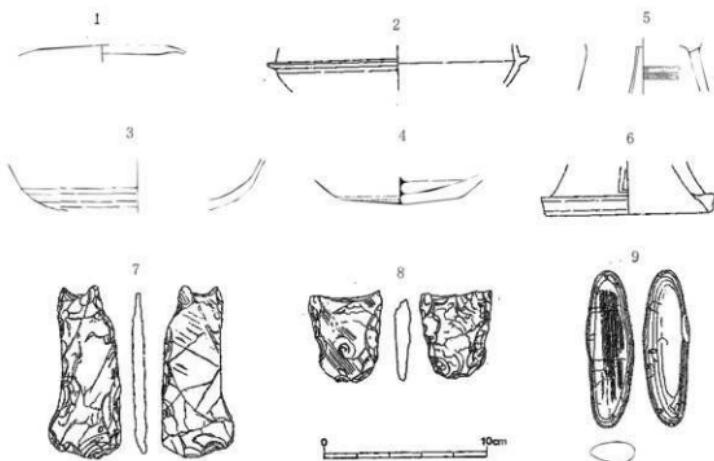
第34図 4号溝状遺構・ぬるめ遺構の遺物の出土状況

の床面上20cmから土師器と須恵器片が出土したが、床面上出土の遺物は皆無であった。

(3) 4号溝状遺構出土の遺物（第35図の1～9）

1は須恵器の蓋坏の天井部である。天井部は平坦で回転鎔削りで整形し、青灰色で堅牢である。2は須恵器の坏身で、受け部径1.6cmで、受け部は0.7cm幅で水平に張出している。受け部の下部外面は凹線状となっており、ねずみ色でやや軟質である。3は口縁部と底部が欠損している坏身で、底部は回転鎔削りで整形しており、淡青灰色で堅牢である。4も口縁部が欠損する坏身である。底部に回転鎔削りの跡が残り、暗青灰色で堅牢である。5は須恵器の高坏の脚部である。上脚部に長方形の透かしを配している。6も須恵器の高坏の脚部である。脚端径は1.0cmで、脚部は「ハ」字状に開き脚端が肥厚し爪先立ち、脚裾部に長方形の透かしを配している。5・6の高坏は陶邑須恵器編年に対応させるとTK2.3型式になり、5世紀末となる。

7・8の石器は、ぬるめ遺構の反対側の4号溝状遺構の西20cmの地山上から出土したものである。両者とも綠泥片岩の打製石錐の破片である。7は残存長10.5cm、刃部幅4.3cm、厚さ

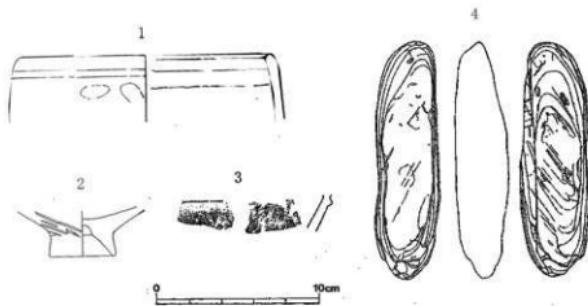


第35図 4号溝状遺構出土の遺物

0.7cmと偏平短冊形で、両面とも剥離面がそのまま残っている。8は残存長5cm、幅4.5cm、厚さ0.9cmで、頭頂部を含む半分が欠損している。両面は軽く剥離調整しているが、腐食が激しい。7・8とも石鍬として使用したものであろう。9はぬるめ遺構がはじまる部分の床面上40cmから出土した緑泥片岩の自然の川石で、加工痕はないが先端部にわずかな使用痕が残っている。長さは9.5cm、幅2.8cm、厚さ1.3cmで、断面は長円形をしている。石杵として使用したのかも知れない。

(4) ぬるめ遺構出土の遺物（第36図の1~4）

1はぬるめ遺構の法面上から出土した青磁鉢であり、ぬるめ遺構に直接関係するものではない。口径は15cmで、口縁部は心持ち内反ぎみに立ち上がり、口縁端は丸く納めている。外面



第36図 ぬるめ遺構出土の遺物

には押圧文らしきものが認められるが、不鮮明で読み取ることができない。口縁部の内面の一部には軸薬があるが、下部ではなく灰白褐色の素地がそのままである。中世の中国系の青磁鉢であろう。2は床面上20cmから出土した土師器片である。底径4cmの倒壺形の底部で、外面は斜め叩きで整形している。内面は箒研磨で、色調は灰褐色で堅牢である。3は床面上40cmから出土した須恵器の甕の口縁部である。斜めに大きく開く口縁部の中程に細く鋭い三角凸帯を巡らし、その下部に多重の波状文を施している。陶邑須恵器編年に対応させるとTK208型式となろう。4は床面上20cmから出土の緑泥片岩の細長い石杵である。長さは14.3cm、幅4cm、厚さ3.3cmで、断面が橢円形を呈し、両端にわずかな使用による打痕が認められる。

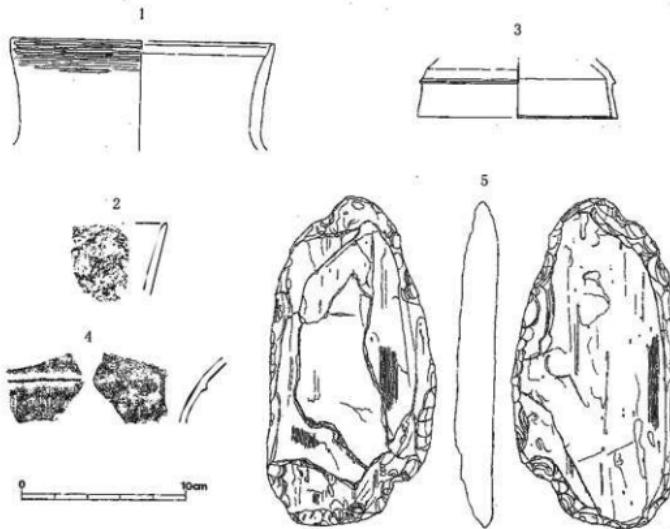
〔14〕4号溝状遺構周辺の柱穴

4号溝状遺構の北東部を挟むように、溝の西側にP14が、東側にP15とP16があり、ぬるめ遺構の水口の東にP17がある。P14は直径18cm、深さ19cm、P15は直径16cm、深さ19cmで、柱穴埋土中から弥生土器片が1点出土した。P16は直径16cm、深さ24cmと深く、柱穴側面に川石が詰め石として入れられていた。これら柱穴は安定した状態での検出であり、何らかの構造物の柱穴であることは間違いないが、具体的のプランは不明である。恐らく、北部の調査地区外に主体部が存在するとみてよかろう。時期は不明であるが、P15だけは弥生時代の可能性が高い。

〔15〕9区出土の遺物（第37図の2～5）

9区の4号溝状遺構北部の柱穴周辺の3層から出土した遺物であるが、どの遺構に伴ったもののかは明らかでない。

2は甕か深鉢の口縁部で、斜め直線的に開き、口縁部内側が若干削られ、口縁端面が尖りぎみになっている。器厚は0.5cmと薄く、外内面とも無文で暗褐色を呈し脆い。胎上、焼成、色



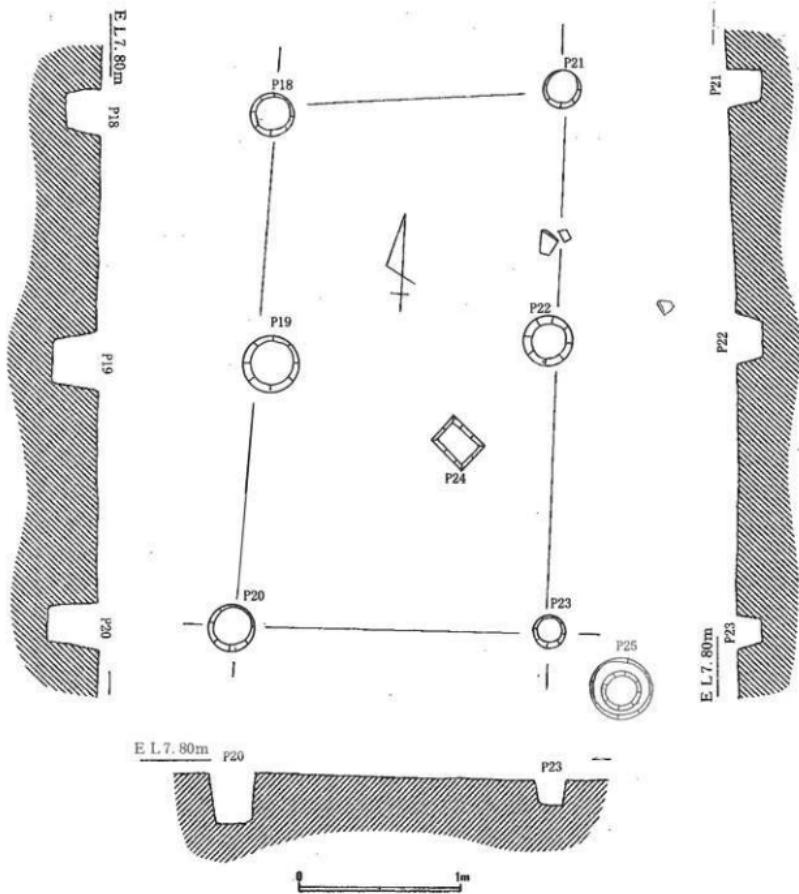
第37図 P10と9区出土の遺物（1のみP10出土）

調などから繩文土器の可能性が残るものである。3は須恵器の蓋環である。口径12cmで体部と天井部の境を鋭く突出する稜で区画している。天井部は欠損しているが、稜上部に残るカーブから丸みもった高さのある天井部が想定される。天井部は回転鎌削りで整形している。体部幅は2cmで、口縁部はわずかに開きながら垂下し、口縁端面は内側に心持ち傾斜しているが、内湾はない。青灰色を呈し堅牢であり、TK216型式に対応可能な蓋環である。4は須恵器の腹の口縁部で、斜めに開く口縁部と頸部の境に、細い鋭く突出する稜を1本巡らし、その下部に細密な波状文を施している。器厚は0.4cmと薄い。青灰色を呈し堅牢である。TK216型式に対応可能とみてよかろう。

5は緑泥片岩の石鍬状石器である。長さ20cm、幅10cm、厚さ2.3cmと大型偏平である。緑泥片岩を剥離した板状の石を、両端を再剥離調整している。石杵とするよりも大型石鍬とするのが妥当であろう。

〔16〕2号掘立柱建造物跡（第38図）

ぬるめ遺構の東3.5mの10区西に所在したP18～P23の長方形プランの6本柱の掘立柱建造物跡である。長軸方向は磁北を指向している。P18は直径26cm、-20cm、P19は直径35cm、-27cm、P20は直径28cm、-30cm、P21は直径23cm、-20cm、P22は直径30cm、-16cm、P23は直径20cm、-14cmである。P19～P20～P23～P22の中には、2



第38図 2号掘立柱建造物跡平・断面図

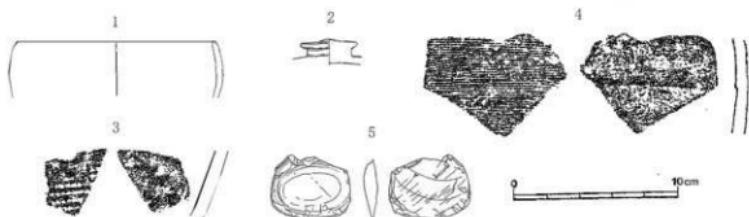
$5 \times 2.5\text{ cm}$ 、 -3.0 cm のP24の方形の柱穴があり、P23の南東 6.0 cm には外側が直径 3.7 cm 、 -1.4 cm 、内側が直径 2.5 cm 、 -2.8 cm の二段掘りのP25の柱穴があるが、2号掘立柱建造物跡に直接関係するものではなく、別の建造物を想定する必要があろう。

P18～P21、P19～P22、P20～P23の距離は 1.80 m であり、P18～P19、P19～P20、

P21～P22は150cmであるが、P22～P23だけは170cmとなっている。同じ6本柱の掘立柱建造物跡である1号とは、短軸方向は同じであるが、長軸方向が45°ずれている。これが時期差を表すのかどうかは不明である。柱穴内からの遺物の出土は皆無であり、P21とP22の間に地山面から、須恵器片と土師器片が出土したが、これが本遺構と直接関係するかどうかを明らかにすることはできなかった。

〔17〕10区出土の遺物（第39図の1～5）

1はP22の東70cmの地山上から出土した土師器碗の破片である。口径12cmで、口縁部は



第39図 10区出土の遺物

わずかに内窵しながら立ち上がり、口縁端面は丸く納めている。明褐色で胎土中に和泉砂岩粒を含み、外内面とも摩滅が激しく脆い。土師器としたが胎土や焼成は弥生的である。2は須恵器の蓋環の宝珠部分である。宝珠径は3.5cm、高さ1.1cmで、宝珠天井部中央が心持ち高くなっているがほぼ水平に近く、淡青灰色で堅牢である。宝珠部分だけからその時期を云々することはできにくいか、TK2.3型式に対応させることが可能である。3は須恵器壺の破片である。外面は平行叩きの上を細い櫛で調整し、内面は同心円当て具跡を丁寧に指撫で消去している。4は土師器片であり、外面は細くシャープな横櫛で調整しており、内面には低い段をもっている。5は風化した安山岩の剝片である。長さは4cm、幅4.8cm、厚さ0.8cmで、川石を剥離しており、片面は自然礫面、片面は貝殻状リングをもつが、剥離面はそのままである。

〔18〕3号土坑（図40図）

10区の2号掘立柱建造物跡南端の東1.7mに所在した土坑である。主軸方向はN-5°-Eを指向し、法面上の長さ150cm、床面上131cm、法面上幅74cm、床面上幅62cmで、深さは南部が-20cm、北部が-10cmとなり、南北両端が丸くなっている。床面は凹凸なく平坦である。土坑中の埋土は黒褐色土の単一層で、遺物の出土はなかった。

〔19〕5号溝状遺構と出土遺物

（1）5号溝状遺構（第41図）

11区中央部の4号土坑に流れ込む溝状遺構である。主軸方向はN-6.5°-Eを指向し、南部100cmがわずかに西に向かって曲がっている。長さは300cm、法面上幅46cm、床面

上幅32cm、深さ36cmで、断面は逆「台形」状で、床面は平坦となっていた。埋土は黒褐色土の単一層であった。北部は4号土坑中央部で終わっており、4号土坑床面を-12cm掘り下げていた。溝床面上と埋土中から若干の遺物が出土した。

(2) 出土遺物(第42図の1~4)

1は溝中央部の床面上10cmから出土した土師器の壺片である。口径37cmで、口縁部は短く「く」字状に外反している。胎土は精選されており、淡黒褐色で堅牢である。2は溝南端の床面上8cmから出土した須恵器の壺身で、底部が欠損している。口径13.5cm、受け部径15cmで、受け部は幅0.6cmで水平に開き、口縁部の立ち上がりは1.6cmで垂直に近い状態である。口縁端面は凹んで段となっている。淡青灰色で、角のある花崗岩粒を若干含み堅牢である。TK47型式に対応させることができる。

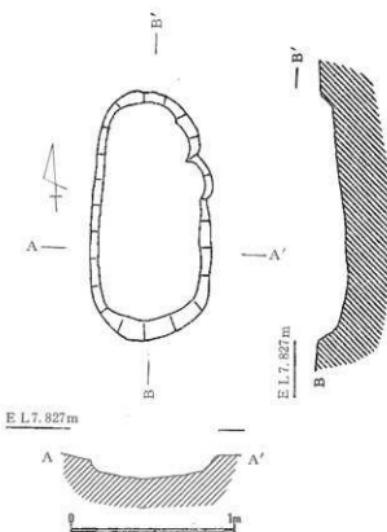
3は須恵器壺の肩部で、外面は平行叩きを籠磨で消去し、その上を更にカキ目状の櫛で調整している。内面に同心円当て具跡があり、部分的に指撫で消去している部分もある。灰褐色軟質であり、TK43型式に対応させることが可能である。4は4号土坑中に延びる溝状遺構床面上3cmから出土の繩文土器片である。口縁部は斜め直線的に外反し、口縁端面を丸く納めている。口縁下外面に波状文を1本巡らしている。色調は暗褐色で、胎土中に花崗岩粒を含み、比較的堅牢である。繩文後期の磨消繩文土器に伴う土器とみてよかろう。

(20) 6号溝状遺構(第41図)

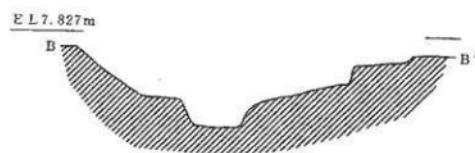
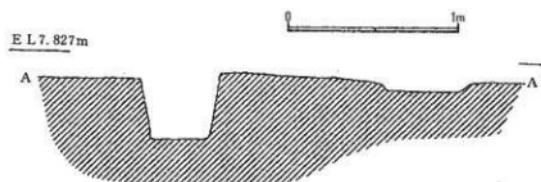
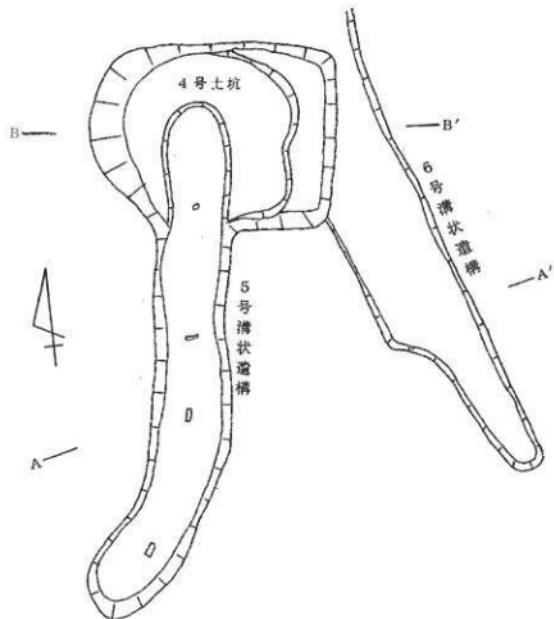
11区の5号溝状遺構の東100cmに所在した溝状遺構である。主軸方向はN-25°-Eを指向し、南端では幅20cm、南端より100cm付近からは50cmと広くなっているが、深さは7cm前後と非常に浅く、埋土は黒褐色土で、北端の5号土坑近くで自然消滅していた。溝中の遺物の出土はなかった。

(21) 4号土坑(第41図)

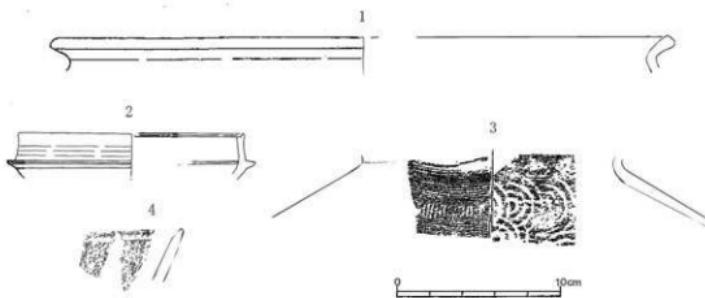
11区のはば中央部に所在した隅丸方形の土坑で、西部が曲線的となっていた。主軸方向は東西を指向し、法面上の東西長143cm、床面上116cm、法面上の南北長107cm、床面上



第40図 3号土坑平・断面図



第41図 5号・6号溝状遺構と4号土坑平・断面図



第4-2図 5号溝状遺構出土の遺物

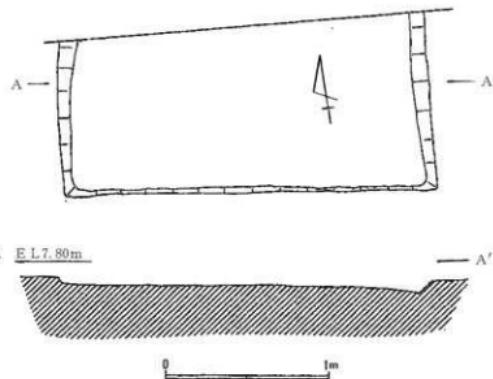
の長さ94cm、深さは28cmである。この床面を更に12cmの深さで円形に掘り込んでいた。5号溝状遺構との関係は、5号溝状遺構が先行し、破棄されたあと4号土坑が掘削されたものである。土坑内の埋土は淡黒褐色土の単一層であったが、遺物の出土はなかった。

[22] 5号土坑と出土遺物

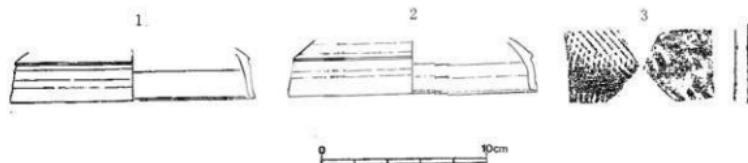
(1) 5号土坑(第4-3図)

11区北部から検出した方形土坑であるが、半分以上が調査地区外にあるため全貌は不明である。本土坑は主軸方向が東西を指向しており、東西長228cm、検出南北長は106cmで、深さ7~10cmであつた。土坑は3層の淡黄褐色粘質土の地山を掘り込んでいたが、上部は大きく削平されていた。土坑中の埋土は黒褐色土で、中央部の床面上から二、三の遺物が出土した。

(2) 出土遺物(第4-4図の1~3)
1・2は須恵器の蓋坏でともに天井部が欠損している。両者とも口径は15cmで、天井部と体部の境は削り出し状に鋭い稜で区画し



第4-3図 5号土坑平・断面図



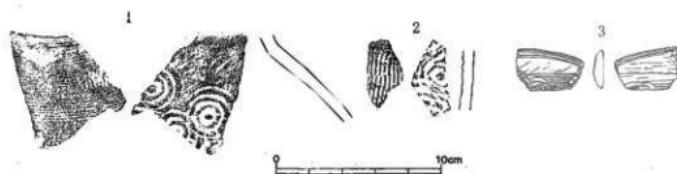
第44図 5号土坑出土の遺物

ている。口縁部はやや斜めに垂下し、口縁端面が丸みをもった段となっている。天井部は欠損しているが、部分的に回転籠削りが残っていることから、籠削り整形が行われていたことは確かである。3は須恵器壺の胸部の破片で、外面は平行叩きを幾何学的に角度を変えて叩いており、内面は同心円當て具跡の上を軽く指撫でで調整している。陶邑須恵器編年に対応させるとTK208型式からTK23型式となる。

(23) 11区出土の遺物(第45図の1~3)

3点とも3層の地山面直上から、遺構に伴わずに出土したものである。1は5号溝状遺構から出土した須恵器壺と同じであり、同一個体の破片かも知れない。2は須恵器壺の破片で、外面は縦位の平行叩きで、内面は同心円當て具で丁寧に調整している。陶邑須恵器編年に対応させるとTK43型式となる。

3は緑泥片岩の磨製石庖丁の破損品である。残存全長4.3cm、幅2.5cm、厚さ0.6cmで、片面の刃部と端面は、綺麗に剥離調整したあとを研磨している。残存部には円孔は認められなかった。



第45図 11区出土の遺物

V まとめ

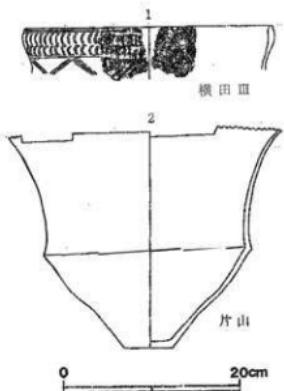
横田遺跡IV区（以下遺跡省略）で検出した遺構には、弥生、古墳、中世の各時代のものがあり、遺物は縄文、弥生、古墳、中世の各時代に属するものが出土した。ここでは各時代別に横田I～IV区や、南接する伊予市片山遺跡との関連性を含めて、簡単にまとめを行ってみたい。

1 縄文時代（第46図）

土器の細片が3点出土しただけで、遺構は検出されていない。3点のうち2点は斜めに外反する口縁下に、平行する沈線文をもつ後期前半の土器であるが、型式名を云々することはできない。横田III区からは口縁部に二列のC型爪形文をもつ前期の土器が、片山遺跡からは体部と口縁部の境に大きく屈折した稜をもち、口縁端に刻み目と長方形の突起をもつ不安定な晩期の深鉢を伴った土坑が発見されているが、後期の遺構遺物は発見されていない。だが、横田遺跡周辺には前期、後期、晩期の遺跡が眠っていることは間違いない。

2 弥生時代

〔1〕弥生前期（第47図）



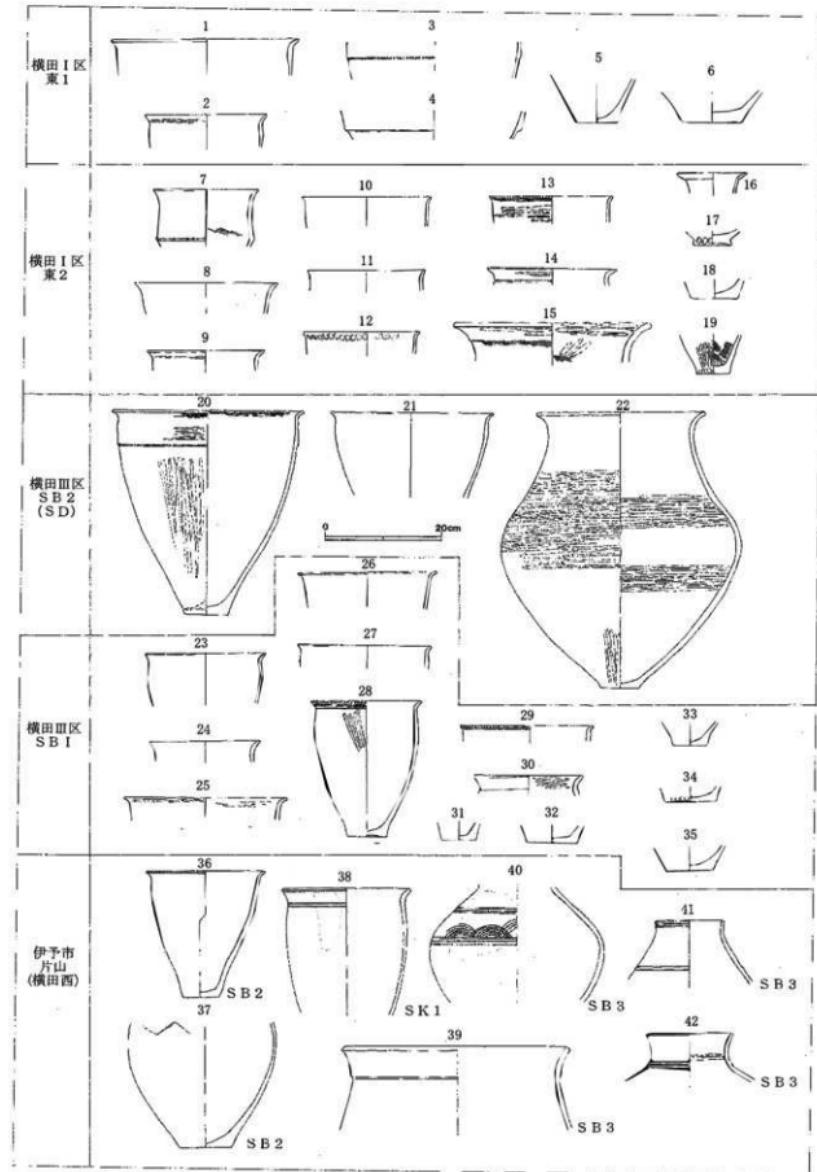
第46図 横田周辺出土の縄文土器

の弥生前期の土器についても触れておきたい。

横田I区の試掘地点は、横田III区の南約35mであり、横田III区と一帯をなす遺跡と理解すべきである。また、片山遺跡もその範囲に入る可能性が高い。横田I区の試掘では、極めて狭い範囲からの出土であり、一括遺物と捉えている。うち、東1は東部の試掘地点からの出土であり、東2は東1の西5mの地点であるので、同一地点とみなして差し支えなかろう。

横田I区の甕は形態的には4群に分類が可能である。その一是7のように体部と口縁部の境が屈折して稜となり、その稜線上に刻み目をもち、口縁部が立ち上がり、口縁近くが緩やか

横田IV区からは前期の遺構は検出していないが、土器片が数点出土している。ともに2区3層中からで、1号土坑内からも1点出土したが、これは流れ込みである。いずれも松山平野の第I様式第1型式に納まる深鉢である。横田III区では1・2号住居跡から同じ土器が出土し、横田I区の試掘溝からも同じ土器が出土している。この他、横田遺跡に西接する片山遺跡からも前期前半の土器が出土しており、横田遺跡を中心とする周辺は、縄文晩期の文化を継承しながら、新しい弥生文化が遅く開花した地域であったことを物語っている。ここでは横田周辺



第47図 横田遺跡周辺の弥生前期前半の土器

に外反するものである。形態的には片山出土の縄文晚期の深鉢の流れを汲むもので、縄文的形態を残しており、縄文晚期の深鉢から弥生前期の甕への移行期の土器と捉えることができる。

1・8 も類似する甕の口縁部とみられる。

その二は、口縁部が短く心もち外反し、胴部の膨らみがほとんどみられない甕である。なかには1・2のように口縁下に指圧痕をもつものや、9のように箒研磨が認められるものもある。これらの甕は上胴部に3・4のように箒削りによる段差をもっていたようである。3は段の上に刻み目を施している。恐らく、横田Ⅲ区の20に類似する甕とみてよい。

その三は、二群の口縁端に刻み目をもつもので、横田Ⅲ区の住居跡出土の28・29と同じである。壺は大小あるが、15・16とも口縁部が削り出しによって帯状となっている。

その四は、甕の頸部に沈線文を1本巡らす14であり、口縁端に刻み目のないものが大半を占めるが、刻み目のあるものや、頸部の沈線文や壺の削り出しの段差もこの時期に出現したことは確かである。底部は17のように上げ底もあるが、大半は平底である。横田Ⅰ区の試掘溝出土の土器は、甕、壺とも形態的には若干の違いはあるものの同時期に使用されていたもので、形態的分類によって前後関係を論ずる必要はなかろう。

横田Ⅲ区のうちの20・21の甕は、同じ住居跡から出土している。20は上胴部に箒削りの段をもち、段上に刻み目をもっている。21は器形は同じであるものの、上胴部の段や刻み目がないが、同時期に使用していたものである。壺は大型の広口壺で、最大胴径が上胴部にあり、外内面を箒研磨で調整している。横田Ⅳ区の甕、壺とも試掘溝出土の土器と同じ型式と理解してよかろう。

横田Ⅲ区1号住居跡出土の甕は、口縁部が短くわずかに外反し、試掘溝や横田Ⅲ区の2号住居跡出土の甕と同じである。28・29は口縁端に刻み目をもっている点では試掘溝出土の13の甕と同じであり、30の頸部下に削り出しによる段をもつ甕は、15・16の壺の段差や横田Ⅲ区2号住居跡出土の20の甕の段と同じである。底部はいずれも平底である。このことから、横田Ⅰ区の試掘溝や横田Ⅲ区の1号・2号住居跡出土の土器は、ともに同じ時期に生産、使用されたものであり、型式論で云々する必要はなかろう。

片山遺跡では、甕は36のように口縁部に刻み目をもち、胴部の膨らみがなく直線的となるが、28とそれほど大きな違いはない。37は山形の削り出しの段をもっており、この点では試掘溝や横田Ⅲ区と同じである。土坑出土の38の甕は、口縁端に刻み目をもつが、頸部に2本の沈線文を巡らしている。口縁端の刻み目の有無による違いはあるが、14の流れを汲むものであろう。3号住居跡から、壺の上胴部に3本単位の箒沈線文を上下に配し、その間に多重の箒描き円弧文を施した最大胴径が中央部にある40の壺と39のように口縁部が緩やかに外反し、頸部に削り出しによる段差があり、口縁部が5.5cm幅で凸帯状となっている壺が出土している。この他、口縁部に違いはあるが、削り出し凸帯を巡らす壺も出土している。41は直口壺で、口縁部と上胴部に1本の削り出し凸帯、42は口縁部がわずかに外反し、頸部に2本の削り出し凸帯を巡らしている。同じ箒削りでも手法に明らかな違いが認められる。

片山遺跡では2号住居跡出土の36・37の甕は、試掘溝や横田Ⅲ区の住居跡出土の甕や壺

と同型式、同時期の範疇に納まる土器であるが、土坑内出土の38の箆描き沈線文を頸部に2条巡らす38は、若干形態的には新しく、3号住居跡出土の土器に近い。3号住居跡出土の土器は、試掘溝や横田Ⅲ区、片山遺跡の2号住居跡出土の土器とは内容において若干の違いが認められる。39は頸部に削り出しによる段差があり、この点では壺15・16、甕20・30と同じである。40は平行沈線文と多重円弧文であるが、ともに箆描きであり、第I様式第2型式としてよからう。41・42は39の削り出し段差とは異なり、両端を箆沈線状に削り出して凸帯としており、手法そのものに違いが認められるが、箆削りという点では共通している。このようなことから、片山遺跡の3号住居跡だけは、39のような古い削り出しをもつものもあるが、円弧文や削り出し凸帯の壺などから、試掘溝や横田Ⅲ区の第I様式第1型式の土器に後続する土器群とみることができる。横田IV区の近くにも弥生前期の遺跡が所在する可能性が高い。この横田を中心とする地域は、北九州地方に発生した弥生文化が遅く流入した四国側の一つの拠点であったようである。伊豫灘に面する松前や伊豫市海岸は関門海峡と一衣帶水関係にあり、かつ、潮流の関係から航路が想定される。極めて対馬や北九州的な弥生前期の有柄式磨製石剣が、松前町宝剣田や伊予市寺山、同宮下東谷、砥部町田ノ浦から出土し、前期の支石墓が宝剣田で発見されていることと無関係ではなかろう。

〔2〕弥生後期（第48図）

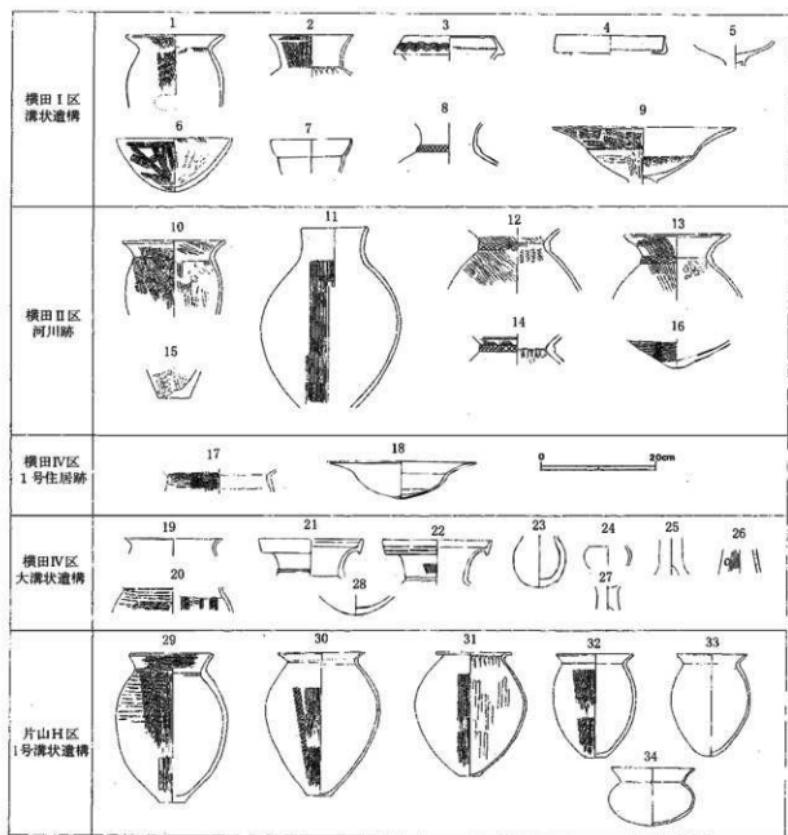
横田や片山地区で弥生中期といえる土器の出土は、現在までのところ確認されていない。ただ、本遺跡の東南1kmの伊予市平松遺跡から、中期の住居跡が1棟出土している。中期の遺跡が多く出現するようになるのは、河岸段丘上のやや高燥な上三谷地区からであり、その一部が行道山のような高地性遺跡へと続いている。

弥生後期になると、再び低地の扇状地の扇端に沿うように分布する。その一つが横田Ⅱ区や横田Ⅲ区の住居跡や大溝遺構、掘立柱建造物跡であろう。横田IV区の住居跡出土の甕、高坏は松山平野の第V様式第5型式に納まるもので、古式土師器直前の土器である。1号土坑は前期初頭の土器片を含むが、その大半が後期末の土器であることから、住居跡や大溝遺構と同じ集落内の遺構とみられる。

大溝遺構の上部から中部には須恵器片と土師器片が遺存したが、下部には須恵器片ではなく、すべて弥生後期末の土器片であった。更に住居跡と大溝遺構の主軸方向が前者がN-44°-E、後者がN-42°-Eとほぼ同じであることから、同時期とみてよからう。3号溝状遺構の法面上から後期の高坏の坏部片が1点出土しただけであり、主軸方向に違いが認められるので、同じ時期とするには躊躇せざるを得ない。1号掘立柱建造物跡は柱穴中から弥生土器片が出土したことから、弥生時代の可能性を否定することはできない。

横田IV区以外で後期の住居跡が出土したのは、II区の後期の隅丸方形の竪穴住居跡だけである。片山遺跡で4棟の竪穴住居跡が発見されているが、隅丸方形プランの3号住居跡が前期である以外は、1号、2号、4号住居跡とも後期末である。1号は隅丸方形、2号は円形、4号も円形プランである。横田IV区と共通するのは1号住居跡とII区の住居跡だけである。

後期の遺構としては、I区で溝状遺構、II区で1号～3号河川跡を発見している。I区の溝



第48図 横田遺跡の弥生後期の土器

状遺構出土の土器は、松山平野の第V様式第5型式であるが、4の二重口縁が垂直に立ち上がる壺や、7の小型丸底壺はすでに古式土師器の範疇で捉えることも可能である。恐らく、弥生土器から古式土師器への移行直前の土器群とみてよかろう。

横田II区の河川跡床面から出土した土器は、甕、壺とも第V様式第5型式に納まる土器群であり、壺は叩き整形の上を櫛で調整している。壺の底部は丸底寸前の円盤形平底である。なかには15のような中期的な平底もある。

横田IV区の住居跡も、甕は平行叩きの上を一部櫛で消去している点は、横田II区の河川跡と同じであり、大きく二段に開く浅鉢の底部は乳頭状となっており、これらも第V様式第5型式

の範疇に納まる。横田IV区の大溝遺構の下部出土の土器は、第V様式第5型式が大半を占めるが、丸底の壺や高环は古式土師器の範疇に入れてもよいものであり、住居跡出土の土器と同じである。

片山遺跡の1号溝状遺構中から出土した5個の甕は、一部に平行叩きが残るもの、大半は外面を刷毛で、内面を鏝削りで調整している。底部は安定した平底であるが、3・3だけは丸底へと変化している。3・4は広口の丸底壺の土師器である。

以上の後期末の土器は、横田IV区の住居跡以外はすべて溝状遺構か大溝遺構、河川跡からの出土という点で共通している。横田I区やII区、更に片山遺跡では完形品や復元可能な土器、石器、それにII区では「しがらみ」などが出土していることから、単に溝や河川に土器を投棄したとは考えられず、水靈信仰か水口信仰的な行事が行われていた可能性が考えられる。このような信仰が古墳時代中期の出作遺跡の水靈祭祀へと発展したのではなかろうか。今までには、溝や河川跡だけの発見であったが、住居跡や土坑が伴うことが明らかになったことから、人工的といわれている伊予市太郎丸、片山、それに横田IV区の大溝遺構は、単なる用水路としてではなく、集落を取り囲む方形濠状遺構の可能性を検討する段階にきている。横田II区の二つの河川跡も自然の開析による河川であるが、川床面に川石を敷き詰め、河川の下刻作用を防いでおり、そこには利水という人工的な作為が看取される。現在までに検出している大溝遺構は、ほぼ南西から北東方向に走行し、わずかではあるが北東部が低くなっている。

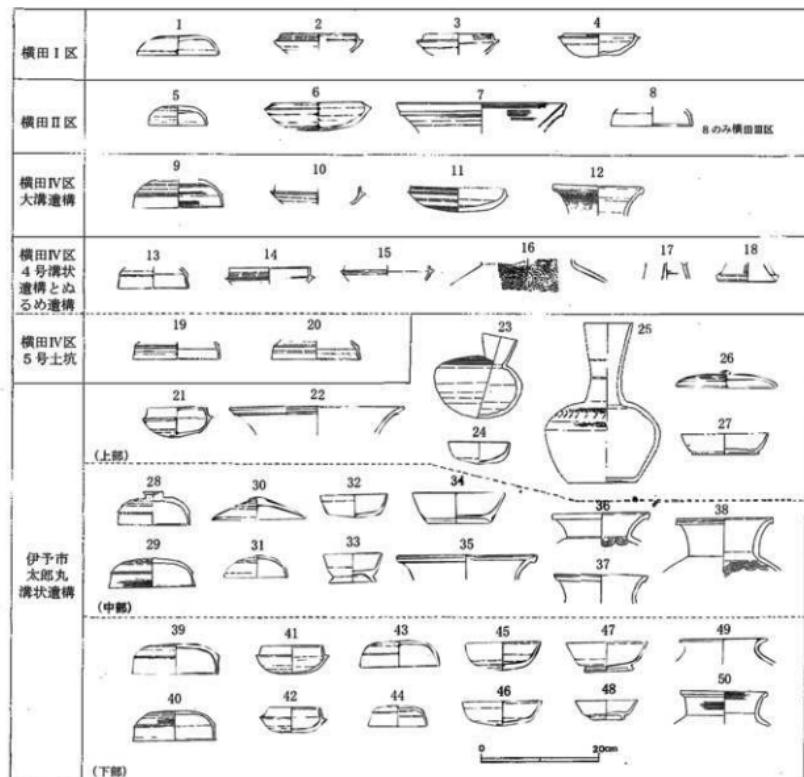
なお、松前町大字横田は、江戸時代の慶安元年（1648）の『伊予国知行高郷村数帳』には「高八百石 大溝村」とあり、元禄13年（1700）の『領國附伊予國村記』には「高八百石 横田村、右は大溝村と申候」とあるので、その間に大溝村から横田村に村名が変更されたことになる。大溝村の大溝という地名は何を示しているのかは明らかでないが、太郎丸や片山、横田IV区の断面がV字形の大溝の存在から、中世まではその一部が残存していたからではなかろうか。これらの大溝遺構は大溝村の地名と全く無関係であるとはいえないようである。

3 古墳時代（第4・9図）

古墳時代の遺構といえるものは、4号溝状遺構とそれに伴うぬるめ遺構、2号掘立柱建造物跡、5号・6号溝状遺構である。遺物はこれら遺構中と大溝遺構の上部から出土した。また、周辺にも弥生前期、後期と同じように古墳時代の須恵器や土師器が出土しているので、これらを合わせて検討してみたい。

現在、カントリーエレベーターの建っている部分の、横田I区3層上部から出土の須恵器蓋環は、遺構に伴ったものではない。1は17区出土の蓋環で、口径14cm、器高3.4cmで、天井部はやや凹みぎみで、口縁部は開き、口縁端面を丸く納めている。2～4はともに环身であるが、受け部の形態に若干の違いが認められる。陶邑須恵器編年に対応させると1～3はTK4・3型式、4はTK2・0・9型式となる。恐らく、南部200mの太郎丸遺跡から東に延びる一帯に古墳時代後期の遺構が存在し、それらに関係した遺物が散乱したものではなかろうか。

横田II区の遺構はすべて弥生時代後期で、古墳時代の遺構は存在しなかった。ただ、2層の灰褐色粘土中から須恵器片が3点ほど散発的に出土した。位置的にみて太郎丸か片山遺跡の古



第49図 横田遺跡周辺の須恵器

墳時代の遺構に伴った土器が、何らかの原因で混入したものであろう。5は口径10cm、器高3.3cmと小型の蓋坏である。天井部は回転箝削りで整形し、天井部と体部の境は明瞭ではない。6は坏身で口径15.5cm、器高4.3cm、受け部の立ち上がり1cmで、斜めに内反している。7は広口壺の口縁部で、漏斗状に大きく開き、口縁端を尖りぎみに丸く納め、口縁下に丸みのある凸帶を1本巡らしている。5・6はTK209型式であり、7の壺は出作遺跡出土の壺の中に同じものがみられ、TK208型式に対応させることが可能である。同じような須恵器が横田IV区からも出土している。横田III区の2層中からも1点ではあるがTK43型式に近似する8の蓋坏が出土している。

横田IV区の大溝遺構上部と太郎丸遺跡の溝中から、時期差のある各型式の須恵器片が出土したことは、それらが流入したことを示している。大溝遺構からの9・10は、少なくともTK

208型式、11の壺身、12の壺はTK43型式に対応させることができる。4号溝状遺構とぬるめ遺構、並びに5号土坑出土の蓋壺はTK208型式からTK23形式に近いが、より古い伊予市市場南組窯跡で生産された蓋壺との関係を追求しなければなるまい。ただ、蓋のなかにはTK43型式とみられるものも認められた。

太郎丸遺跡の溝状遺構は古墳時代のもので、上・中・下部とも須恵器が半数を占め、残り半数は土師器と陶質土器であり、須恵器の大半が蓋壺であったといわれている。

溝上部の21の壺身、22の壺は南組窯跡出土の初期須恵器とみてよく、23～27はいずれもTK46型式からTK48型式に対応させることができるとある。溝中部の28・29の蓋壺はTK23型式に、30～32はTK217型式に、33・34はTK46型式からTK48型式に、35～38の壺はTK43型式にそれぞれ対応させることができる。

溝下部の39～42の蓋壺と壺身は、大小の差はあるもののTK23型式に、43・44はTK43型式、45～48はTK46型式、49・50はTK216型式にそれぞれ対応させることができるとある。このように、溝状遺構中に5世紀中葉から7世紀後半にかけての須恵器片が混在した状態で出土したことは、溝中の埋土は安定した状態でなかったということになろう。この点が横田IV区の大溝遺構と若干異なっている。

溝以外の他の遺構についても、若干ではあるが検討してみたい。

横田IV区の後期末の竪穴住居は、方形プランであり、横田II区の住居跡も同じであった。片山遺跡では4棟の住居跡が明らかとなっているが、1号住居跡は隅丸方形、2号と4号は円形プランの住居跡である。3号住居跡は弥生前期の方形プランで、横田III区の住居跡も同じである。松山平野南部においては、弥生前期初頭は方形プランが卓越していたようであるが、前期前半から中期になると円形プランが中心になり、後期になると円形プランから隅丸方形プランへと変化する傾向が認められる。片山遺跡の2号、4号の円形住居跡は、方形プランへ変化する直前の後期中葉あたりとみてよく、弥生後期末になると隅丸方形や方形に変化し、これが古墳時代へと引き継がれている。この時期の住居跡が片山遺跡の1号住居跡や横田II区、IV区の住居跡であろう。

横田IV区の中世の1号溝状遺構の床面上に川石が敷かれていたが、このような例は、すでに弥生後期の横田II区の1号と3号河川跡でも認められている。横田周辺の河川床面は弥生、中世とも流水の下刻作用を防ぐため、床面に川石を敷き詰めて利水を行っていた。太郎丸と片山遺跡の大溝と横田IV区の大溝遺構は、断面がV字状となり、床面に敷石をもっていなかったのは、河川跡でないことを現しており、防禦的な性格をそこに垣間みることができる。

横田地区で今回はじめて2棟の掘立柱建造物跡が検出されたが、太郎丸遺跡では多くの掘立柱建造物跡が発見されているので、これらと比較検討をしなければならないが、非才のためにできない。ただ、横田IV区の2棟の掘立柱建造物跡は、主軸方向と桁間隔に違いがあり、1号掘立柱建造物跡は規則性がないが、2号掘立柱建造物跡には規則性が認められる。前者は柱穴中から弥生土器が出土したことなどから弥生時代前期の、後者は古墳時代中期後半の掘立柱建造物跡と想定しておきたい。

古墳時代中期後半の4号溝状遺構とそれに伴うなるめ遺構は、当時の水稻栽培の様相を知る一つの手掛かりとなろうし、農業用水の水温にまで意を用いていたようである。

以上のように、横田遺跡を中心とする周辺には、縄文前期、後期、晚期、弥生前期、後期、古墳時代中期、後期の遺物や遺構が出土しており、各時代の遺跡が面的な広がりをもって分布している。将来は、低地で発見された環濠的な大溝遺構と河川跡との関係などの追求も行わなければなるまい。

主要参考文献

- 1 山本雅夫「伊予市の弥生時代の文化」(『愛媛の文化』13号) 1973
- 2 愛媛県「弥生土器の編年」(『愛媛県史』原始・古代) 1982
- 3 愛媛県埋蔵文化財調査センター『上三谷古墳群』1987
- 4 伊予市教育委員会『上吾川・森埋蔵文化財調査報告書』1991
- 5 松前町教育委員会『横田遺跡』1992
- 6 長井数秋「松山平野の須恵器編年」(『愛媛考古学』12号) 1992
- 7 松山市「弥生土器と時期区分」(『松山市史』第1巻・原始) 1992
- 8 長井数秋「伊豫市の先史時代I」(『伊予市の歴史文化』28号) 1993
- 9 愛媛県埋蔵文化財調査センター『県道「伊予一川内線」関連埋蔵文化財調査報告書・平松遺跡』1993
- 10 松前町教育委員会『出作遺跡I』1993
- 11 伊予市教育委員会『伊予市内遺跡分布図』1993
- 12 伊予市教育委員会『下三谷片山・太郎丸埋蔵文化財調査報告書』1993
- 13 長井数秋「伊豫市市場南組1号窯跡出土の須恵器」(『ソーシャル・リサーチ』20号) 1994
- 14 松前町教育委員会『愛媛県松前町横田遺跡II区調査報告書』1996
- 15 松前町教育委員会『愛媛県松前町横田遺跡III区調査報告書』1996
- 16 長井数秋「松前町宝剣田遺跡出土の有柄式磨製石剣と支石墓」(『愛媛考古学』14号) 1997
- 17 松前町教育委員会『愛媛県松前町楠木遺跡発掘調査報告書』1998
- 18 長井数秋「松前町内の遺跡発掘調査」(『松前史談』17号) 2001